

アメリカ大衆文化における古代エジプト

—Anne Rice 著 *The Mummy or Ramses the Damned* を中心として—

尾 上 典 子

まえがき

- I *The Mummy* 創作の契機となった imperial Gothic 小説
- II *The Mummy* 創作の契機となった映画
- III 現代に蘇った古代人の愛と苦悩の物語としての *The Mummy* 結び

まえがき

Anne Rice (1941 年～) が 1989 年に発表した *The Mummy or Ramses the Damned* は、ミイラが登場する世界文学の中で最も人気を博している長編小説である。Rice が妖艶で危険な不死者たちの一大絵巻 *The Vampire Chronicles* を創りあげた現代アメリカの作家であることは周知の事実であるが、彼女の関心は *The Withching Hour* (1990 年) や *Lasher* (1993 年) におけるように、魔女や精霊（あるいは悪霊）に向けられることもあり、彼女の創作の最大のエネルギーは超自然的な生き物への情熱的な愛情であると窺われる。従って彼女が、太古の昔からの眠りから醒めて現代に復活するミイラを主題とするファンタジー小説を書いたのは至極当然なことであった。すなわちヴァンパイア、魔女、精霊、ミイラ全てに共通するのは、彼らが永遠の生を象徴する神秘的な存在であるという点である¹⁾。そして Rice が *The Mummy* 以前に発表した *The Vampire Lestat* (1985 年) と *The Queen of the Damned* (1988 年) の中で彼女は、全てのヴァンパイアの起源は古代エジプトの王 Enkil と女王 Akasha であり、超自然的な悪霊によって肉体を奪われた彼らはヴァンパイアに変身し、最終的に古代エジプトの神 Osiris と女神 Isis として神格化されたのだと述べている²⁾。Enkil と Akasha は多くの人々を自分たちと同じヴァンパイアに変え

たが、やがて動くことができない状態に陥って眠り続けた後、Akasha は現代 (1980 年代) に蘇^{よみがえ}り、まだ眠っていた夫を殺して全世界にとって超自然的脅威となるが、かつて彼女に迫害された二人の善良な魔女 Maharet と Mekare によって滅ぼされる。このように Rice のヴァンパイア小説の底流にあるものは古代エジプト人の世界や神秘主義思想であったと推察される。

The Mummy は数ある Rice の小説の中で、彼女がミイラという主題を最も広範囲に渡って取り上げた作品であり、21 世紀初頭現在、歴史上のどのミイラ文学作品をも凌ぐ売れ行きであるにもかかわらず、彼女の *The Vampire Chronicles* の極めて洗練された哲学的論考と技巧的で装飾的な作風に魅了されてきた批評家や一部の読者は、この作品を、通俗的で浅薄な、金儲けのために書かれた駄作であると酷評してきた³⁾。*The Mummy* の主人公は古代エジプトで最も優れた王として知られる Ramses (Ramesses) II 世 (1303~1213 B.C., 在位 1279~1213 B.C.) で、霊薬によって不老不死の身となっていた彼は、恋人 Cleopatra (69~30 B.C.) の死を悼んで毒薬を飲み、ミイラとして埋葬されていたが、1914 年に眠りから醒めて、美しく聡明なイギリス娘との恋に落ち、彼女も霊薬を飲んで、二人は永遠の愛に生きることとなる。勧善懲悪とハッピーエンドを特徴とするこの物語には、Rice のヴァンパイア小説の暗鬱さや悲壮な雰囲気は漂っていないことが、文学批評家たちから疎んじられる原因となっているように私には感じられる。更に Ramses II 世と Cleopatra という古代エジプト史上で最も著名な人物二人がミイラから蘇生して現代世界で生きて行くというストーリーが荒唐無稽であると批判される場合があった。しかし、この小説が表面的には単純明快に見えることや、Rice 自身が Victoria 女王時代の作家 Conan Doyle と H. Rider Haggard、小説や映画においてミイラに生命を吹き込んだ全ての人々にこの作品を捧げる⁴⁾と述べている所から類推して、*The Mummy* が Victoria 女王時代の代表的スリラー小説の模倣作品あるいは 1932 年の Universal 映画 *The Mummy* (主演 Boris Karloff) に始まる標準的なミイラ映画の延長線上にある内容の小説であると結論するのは余りにも短絡的である。*The Mummy* を書く上で Rice が上記のような文学作品や映画に

触発されたことは事実であるが、彼女はこれまでのミイラ文学やミイラ映画では決して試みられなかったような斬新で極めて真摯な姿勢でミイラから蘇った不死者を描きながら、神話的寓意性に富んだ独創的な大衆芸術を創造したのであった。

Napoleon のエジプト遠征（1798～1801 年）に始まり、数々の驚嘆すべき考古学上の発見によって助長され 19 世紀の欧米の社会を席卷した空前のエジプトブーム（Egyptomania）は、古代エジプトのミイラを主題とした夥しい文学作品や、その影響を受けた映画を生み出すこととなったが、殆どの場合そこに登場するミイラは、墓を発掘されたことに対する復讐に燃えて人々を次々に殺傷するが、最終的には文明社会によって滅ぼされる忌まわしい破壊的な怪物として描かれ続けてきた。これに対して Rice の *The Mummy* の主人 Ramses は人間を超越した神に近い存在で、優れた知性と類い^{たぐ}まれ^{まれ}稀な美貌で周囲の人々を魅了し、正義を愛し、豊かな感受性に恵まれている。Rice のこの小説がいわゆる恐怖怪奇小説には属さないファンタジー路線にあることに不満を持ち、芸術的価値を過少評価する人たちは、そもそも彼ら自身がミイラに対する固定観念から脱し切れず、キリスト教的理念と対立する古代人の宗教が生み出したミイラが蘇り、現代社会に順応して、英雄として生きて行くという内容の物語に対して、本能的な恐怖を抱いていると推察される。Bram Stoker, H. Rider Haggard, Conan Doyle, Richard Marsh の作品で描かれている古代エジプトは、磁氣的魔力によって西洋の人々を引き寄せるが、その正体は禍々^{まがまが}しい凶悪な世界で Anglo-Saxon 人によって征服されるべき宿命を負わされているものとして描かれていることが非常に多い。こうした文学上の因襲の固定観念にとらわれず、Rice が英知あふれる古代人 Ramses の口を通して現代社会を痛切に批判し、「不老不死」が人間にとっていかなる意義を持つかについて探求した *The Mummy* が英米文学史および英米文化史に占める重要な位置について考察することが本稿の目的である。

【注】

- 1) Matt Cardin, “Anne Rice” in Matt Cardin (ed.), *Mummies around the World: An Encyclopedia of Mummies in History, Religion, and Popular Culture* (Santa Barbara: ABC-CLIO, 2015), p. 355.
- 2) Anne Rice, *The Vampire Lestat* (New York: Ballantine Books, 2010), pp. 433-436; Anne Rice, *The Queen of the Damned* (New York: Ballantine Books, 2010), pp. 329-348.
- 3) Bette B. Roberts, *Anne Rice* (New York: Twayne Publishers, 1994), p. 94; Paula Guran, “The Mummy in Western Fiction: From 1922 to the twenty-first century” in Matt Cardin (ed.), *op. cit.*, p. 282.
- 4) Anne Rice, *The Mummy or Ramses The Damned* (New York: Ballantine Books, 1999).

I *The Mummy* 創作の契機となった imperial Gothic 小説

Anne Rice は *The Mummy* の献辞の中で、この作品を、偉大なミイラ小説 “Lot No. 249” (1892 年) と “The Ring of Thoth” (1890 年) を書いた Sir Arthur Conan Doyle, 不滅の *She* (正確には *She: A History of Adventure*, 1887 年) を創造した H. Rider Haggard, 短編小説・長編小説・映画においてミイラに生気を吹き込んだ全ての人々に捧げると述べている。Gary Hoppenstand が指摘している通り、幾つかの意義深い点で Rice の *The Mummy* はイギリスの伝統的スリラー小説の形式に敬意を表し、その形式を踏襲しているが、それは、彼女の作品を読もうとしている読者たちに彼らにとって馴染み深い状況を提示するためであり、彼女は、伝統的手法を用いて「軽快なテンポの冒険小説」を生み出すと同時に、独自の見解を発展させて極めて洗練された寓意小説を創造したのであった¹⁾。

本章では Anne Rice が “great mummy stories” と賞讃した Conan Doyle の “Lot No. 249” と “The Ring of Thoth” について分析したい。まず小説の題名となっている「競売番号 249」とは、Oxford 大学で東洋言語を専攻している学生 Edward Bellingham が 1884 年にオークションで手に入れたミイラをさしている²⁾。生前は古代エジプトの第 11 王朝（紀元前 2100～2000 年）の王

族か貴族であったと推察されるが、石棺の外蓋が紛失しているために名前が分からない男性の遺骸は、小説の中では、競売のさいの番号だけで呼ばれている。このミイラは Bellingham によって蘇生させられた後に、彼が恨みを抱いている学生たちを襲って怪我を負わせるのだが、物語の展開以上に慄然とさせられるのは、古代人の遺骸が競売で取引されていたという設定である。だが作者 Doyle は、人間の亡骸の売買が倫理的基準に照らしていかに極悪非道な行為であるかについては全く触れずに話を進めて行く。既に述べたように 19 世紀欧米における “Egyptomania” すなわち古代エジプトへの熱狂的関心は一大社会現象を引き起こしたが、特にイギリスの裕福な人々は、古代エジプトに憧憬の念を抱いただけでなく、エジプトを旅行して遺物を収集し、その国のエキゾチックな魅力と「東洋の神秘」のシンボルとしてのミイラを戦利品として自国に持ち帰り、家族や友人たちに誇らしげに見せたものであった。1833 年にフランスの Ferdinand de Géramb は「エジプトを旅行したヨーロッパ人が帰国後、片手にはミイラ、片手には鰐わにを持っていないとしたら、殆どばつの悪い思いをした。」³⁾と語ったと伝えられている。

更に Victoria 女王時代のイギリスでは、古代エジプト人のミイラを包んでいる亜麻布をほどく「解包」(“mummy unwrapping”) が、広い会場や個人の邸宅で、しばしば行なわれた。「科学的デモンストレーション」と「娯楽」の二つの目的のためにアマチュア・エジプト学研究者たちは疑似科学的な組織 “Mummy Party” を結成し、購入したミイラの解包を行なったことがよく知られており、これを主題として書かれた最も名高い小説の一つが、*Dracula* の作者 Bram Stoker の *The Jewel of Seven Stars* である⁴⁾。すなわちこの作品において、大富豪のエジプト学研究家 Abel Trelawny は、エジプト学者と医師を指揮して、第 11 王朝の女王 Tera のミイラの解包を自宅で行なった後に不可解な死を遂げる。Trelawny は 20 世紀の現代に Tera を蘇らせたいと願いながらも、古代の女王を完全に支配したいと望んでおり、解包が自分の歪んだ情熱の生み出した行為であるとは自覚していない。このような Trelawny の心の動きの中に Victoria 女王時代のイギリスの人々が古代エジプトの文化やミイ

ラに対して抱いていた複雑な感情を読み取ることができる。

歴史上の事実を調べると、探検家でアマチュア考古学者であったイタリア人 Giovanni Battista Belzoni (1778～1823 年) は、Ramses II 世の巨大な胸像を Luxor からイギリスへ運ぶことに成功し、1817 年に Thebes 近郊の王家の谷で Ramses II 世の父 Seti I 世の墓を含む王族の墓を発見したことで名高いが、彼は、1821 年 4 月から一年間にわたって London の Piccadilly Circus にある Egyptian Hall で Seti I 世の墓所の内部を再現して遺物を展示する大規模なショーを開催した⁵⁾。そしてこのショーで Belzoni はミイラの解包を行なって観客を興奮させた。ミイラを登場人物とする英語で書かれた最初の小説は Jane C. Loudon (Jane Webb) が 1827 年に匿名で発表した *The Mummy!* であるとされているが、彼女がこの小説を書く契機となったのが Belzoni のショーでのミイラの解包であったと言われている。Egyptian Hall でのショーは大成功を収めたが、1822 年 4 月に終わった後、展示物の中にはオークションにかけられて大英博物館や個人の収集家が所有することになった貴重な遺物もあった⁶⁾。従って Doyle の“Lot No. 249”で、大学生 Bellingham が競売でミイラを獲得したとされているのは、19 世紀のイギリスでは決して不思議ではなかったことが分かる。Bellingham の部屋はエジプトや東洋の遺物で満たされた博物館のようであり、天井からナイル川の鰐の剥製が吊されていたと述べられている。彼の部屋のテーブルの上にはミイラを入れた石棺が置かれており、Doyle はそのミイラを「黒く萎びた忌まわしい物で、瘤だらけの灌木に黒焦げの頭をつけた」⁷⁾ ような有様であったと記している。Bellingham は東洋言語の分野では極めて優秀で、彼がナイル川第二急流の上流地域で現地の人々と流暢に話をし、隠者たちから非常に敬われていた様子を Oxford 大学の学生が目にしたと述べられている。主人公 Abercrombie Smith は医学を専攻しており、敏捷そうな顔立ちで、性格も趣味も男らしく強健で、スポーツ好きで野外型の心身ともに健全な人間として描かれているが、これに対して Bellingham は口数が少なく勉強熱心だが不自然に肥満しており、Smith の親友の一人は彼を「密かな悪徳を秘めた邪悪な奴」⁸⁾と評している。そして Bellingham は

Smith に向かって「善と悪、救いの天使と復讐の悪魔を意のままに操っているという感じは素晴らしいものだ」⁹⁾と興奮しながら語ったことがあった。パピルスの巻物に書かれていた呪文を唱えてミイラを蘇らせた彼は、過去に自分を殴ったことがある学生を夜道で襲わせた。Bellingham は学友 Monkhouse Lee の妹と婚約していたが、ミイラと深い関わりを持つような男と妹を結婚させられないと Lee から告げられて復讐と憎悪に駆られ、ミイラに命じて Lee を Thames 川に投げこませる。二人の学生は命を取りとめたものの、Smith はこれらの事件が起こったときに Bellingham の部屋のミイラが姿を消していることに疑惑を覚えた。彼は事件との繋がりを否定する Bellingham に向かって「君の汚らしいエジプト的な策略がイギリスでは通用しないと分かるだろう。」¹⁰⁾と怒鳴りつける。Gary Hoppenstand が指摘しているように“Lot No. 249”で Smith は Bellingham とミイラにまつわる不可解な出来事を調査・解明する探偵の役を演じている¹¹⁾ので、この作品を Sherlock Holmes シリーズと共通した推理小説として読むことができる。Bellingham は Oxfordshire の夜道を歩いて友人の屋敷を訪ねる習慣がある Smith をミイラに襲わせようとするが、間一髪で Smith は難を逃れる。この物語に登場するミイラは邪悪な学生に操られる怪物であり、人格は一切持たず、その行為はおぞましい外見と同様に醜く、恐怖と嫌悪の対象以外の何物でもない点に注目すべきである。Smith は Bellingham と対決することを決意し、249 という競売番号が記された棺の中で固くこわばっている醜悪なミイラを解剖用のメスで切り刻んで燃やすように Bellingham に命じる。Smith にピストルで脅された Bellingham は、彼の所有物である高価なミイラをメスで叩き切るが、その有様を描いた場面こそ、Doyle のこの小説の中で最も恐ろしく残酷で怪奇的な場面である。

鋭い刃で突き刺されるたびに、怪物は鋭い音を立てて壊れて行った。もうもうたる黄色い埃がその体から立ち上った。香料と乾燥した精油が、雨あられと床に降り注いだ。突然、裂けて碎ける音を立てて、背骨がばらばらになり、手足をぶざまに伸ばした茶色の塊となって、それは床に倒れた¹²⁾。

暖炉に投げ込まれたミイラの残骸は樹脂や髪の毛のきつい臭いを発散させながら燃え上がり、「15 分後には、黒焦げになって今にも崩れそうな数本の棒が、競売番号 249 であったものの全て」となった。

Doyle の分身と見られる Abercrombie Smith がミイラを、黒魔術師 Edward Bellingham の手先であり「滅ぼされるべき物」¹³⁾として捉えていることは歴然としている。悪名高い“Mummy Parties”で、ミイラを解包した後に恐ろしい抜け殻の回りに集まって謹厳そうな表情を顔に浮かべている人々の写真は現在でも見ることができるが、これらの実在の人間や“Lot No. 249”の登場人物たちはミイラに対する同情心は全く持ち合わせていないと推察される。Patrick Brantlinger は、19 世紀末の Victoria 女王時代の多くの作家が帝国主義のイデオロギーをふりかざしながらも超自然現象や神秘主義に強い関心を示し、Gothic 小説の主題と手法を用いて創造した作品を“imperial Gothic”と定義した。このような小説では帝国主義者たちの冒険が描かれながらも、大英帝国、より広義には西欧文明の永続に対する不安感が暗示されている¹⁴⁾。“Lot No. 249”は、まさしく“imperial Gothic”の典型的な作品であり、保守的な Doyle が文化的自民族中心主義を表現した作品であるとみなすことができる。しかし物語の最後に、Oxford 大学を去った Bellingham が Soudan で暮らしていたという記述があるので、彼が生涯その地で神秘主義を探索し続けたであろうと推察され、Doyle が Bellingham をも、彼自身の分身の一つとして行動させていたようにも感じられる。

これに対し“The Ring of Thoth”は古代エジプト人の叡智、不死の生命を獲得した人間の苦悩、時間を越えた不滅の愛などが主題とされた叙情的な作品であるので、Rice の *The Mummy* との類似が、かなり認められる。

物語の中でイギリス人のエジプト学者 John Vansittart Smith (“Lot No. 249”の主人公の名前も Smith であったことが思い起こされる。)は Louvre 美術館のエジプト室で旅の疲れのために眠りこんでしまい、目が覚めると真夜中になっていた。彼の回りには、窓から射し込む月明かりに照らされたエジプトの遺物と陳列ケースに収められたミイラが並んでおり、「完全な静寂」が彼に

強い印象を与えた。

彼は、滅び去った文明を築いた死者たちとともに唯一人取り残されていた。だが外の世界はけげんばしい 19 世紀の悪臭を放っていた！ この部屋にあるものは全て... 4000 年という時間に耐えてきた。ここにあるのは彼方の帝国から時間という大海によって岸辺に打ち上げられた漂流物であった。荘厳な Thebes から、威厳に満ちた Luxor から、Heliopolis の偉大な神殿から、そして盗掘された数多^{あまた}の墓から、これらの遺物は運ばれて来たのだ... 生前は忙しく心^{うやうや}を悩ませ続けていたが今は全く安らかな状態の死者たちを見て、学者は恭しく物思いにふける気持ちになった¹⁵⁾。

上の引用文は“Lot No. 249”とは対照的な詩的でロマンティックな雰囲気¹⁵⁾に満ちており、別人が書いたと思われるほどである。真夜中のエジプト室で Vansittart Smith が夢想到に耽っていると、彼が日中に館内で会った職員が人目をはばかる様子で陳列ケースに近づいてミイラを取り出し、愛情深く気づかしげに床に置いた。その男は好奇心に満ちた学者に目撃されているとも知らず、震える指でミイラを包んでいる巻き布をはがし、それとともに強い芳香がエジプト室を満たし、香木の破片や香辛料の粉が大理石の床に音を立てて落ちて行った。4000 年の時を経て巻き布から現われたのは驚嘆するほど美しい若い婦人の頭部であった。男は、美しい死者を抱いて接吻し、話しかけた後に、宝石類の陳列ケースの中の指輪を調べていたが、このときに自分が Vansittart Smith に観察されていたと気づき、凶悪な表情で学者を脅す。一方、ほんの数分前まで若さと美貌に溢れていたミイラの顔は、外気に晒されたために醜く変わってしまった。だが、謎の男は悲嘆と恐怖を克服して「私は探していたものを見つけたのだ。長年の呪いは解かれた。私は彼女と一緒にいることができる。彼女の魂が死のとおりの向こう側で私を待っているのに、命のない抜け殻などに何の意味もない！」¹⁶⁾と語る。

今や自分は別世界への入口に片足を置いているのだと告げた後、誇り高い古

代エジプト人 Sosra は 3500 年に渡る自分の人生の秘密を語った。キリスト誕生の 1600 年前の第 18 王朝 Thutmose I 世の時代に Osiris の神官長の息子として生まれた彼は、自然の神秘について独力で研究した結果、生命体を不老不死に近い状態に保つことができる霊薬を開発し、その物質を自らの血管に注射した。彼は Atma という美しい娘と愛し合うようになり、彼女にもこの霊薬を与えようとしたが、彼女はそれが神の意思に背くことではないかと躊躇しているうちに肺結核に冒されて急死してしまった。Sosra は最愛の恋人のもとへ行くために死を切望したが、呪われた薬のために、苦しみながら生き続けることしかできなかった。一方、彼と同じように Atma を愛していた Thoth の神殿の神官 Parmes は、Sosra から秘薬を与えられていたにもかかわらず、その力を凌駕する毒を開発したので、卑しい現世を去って Atma のもとへ行くことができる」と述べて、自殺してしまった。Parmes から毒液は Thoth の指輪の中に隠されていると聞いていた Sosra は、何とかしてその指輪を手に入れようとしたが見つけれず、時の流れの遅さに苦しみながら 19 世紀まで生き続けてきた。彼は Atma の墓が最近発掘され、ミイラと指輪が Louvre に運ばれたと知り、幸いこの美術館の守衛の職を得ることができた。遂に Thoth の指輪中の秘薬を発見した Sosra は、自分にとって「最悪の病よりも忌まわしい、呪われた健康を捨てることができる」¹⁷⁾と Vansittart Smith に告げて、彼を美術館から立ち去らせた。彼はイギリスに帰国した後、Louvre 美術館でミイラを抱きしめて死んでいる館員が発見されたという新聞記事を読んだ。そして警察当局は、この年齢不詳で風変わりな男が「個人収集家に売る目的でミイラを運び出していたときに、長年患っていた心臓病の発作で急死したものと判断した。」¹⁸⁾と述べられている。

“The Ring of Thoth” は “Lot No. 249” の約半分の長さの短編小説であるが、数十世紀を生きてきた博学な古代エジプト人の前でエジプト学者は完全に圧倒されている。Doyle は Louvre 美術館のエジプト室の静寂の中にある荘厳さと外界の 19 世紀的喧騒を対比させ、時間を超越する不滅の愛に殉じた古代エジプト人を卑しいミイラ泥棒としか推理できない Victoria 女王時代のイギ

リス人たちの浅薄さを指摘している。この作品の中で Sosra は「エジプトにおける我々古代人の生活の要^{かなめ}となっていたのは、お前たちが余りにも重視している碑文や記念碑ではなく、お前たちが殆ど或いは全く語っていない鍊金術の哲学と秘教の知識であった。」¹⁹⁾と Vansittart Smith に告げ、西欧世界の文明人と称する人々が古代エジプトの文化について表面的事象しか捉えていないことを鋭く批判している。この小説において Doyle がエジプト学 (Egyptology) を「人類の文明の最初の萌芽」に光を当て「人類の芸術と科学の殆どの起源」を解明する学問であると定義している所から、彼がいかに古代エジプトに心酔していたかが推察される。しかし「後世の全ての人々の羨望と驚嘆の対象であった数々の偉大な建造物を築いた... 荒々しく冷徹な民族の生き残り」²⁰⁾である誇り高い Sosra にとっての救済が「死」以外の何物でもなかったと Doyle が結論しているのを読めば、古代エジプトがいかに絢爛たる世界であったにせよ、所詮は滅び去る運命にあったと暗示しているように感じられる。

Conan Doyle と古代エジプトとの関係で忘れてならないのは「ミイラの呪い」である。Doyle の友人であったジャーナリスト Bertram Fletcher Robinson は大英博物館に運ばれてきた古代エジプトの女性神官のミイラの研究に没頭し、「20 世紀の我々が嘲笑するかも知れないが決して解明できないような力をエジプト人が持っていたことは確かである」と述べていたが、1907 年に腸チフスで急死した。彼の死について Doyle は次のように語った。

私は Robinson 氏に大英博物館のそのミイラに関わらないよう警告したが、彼は固執し、その結果、彼は亡くなってしまった... 私は彼に調査を続けることによって非運を招きつつあるのだと告げたが、彼は研究に魅了され、思いとどまろうとしなかった... 直接の死因は腸チフスであるが、ミイラを守護している精霊たちが病気を引き起こしたのかも知れない²¹⁾。

Tutankhamun 王の呪いと Doyle との関わりも有名である。1922 年に Thebes の王家の谷で Tutankhamun の墳墓を発掘した Howard Carter の調査

隊の資金提供者であった Carnarvon 卿を始めとする関係者が次々に急死したと報じられたとき、世の人々は、偉大なファラオの墓の神聖さを冒涇した者には速やかな死が襲いかかるであろうと墓の入口に刻まれていた通りに、発掘に携わった人たちがファラオの呪いによって罰せられて非業の死を遂げたのではないかと想像した。Conan Doyle もこの報道に大いに関心を抱き、新聞のインタビューで、Carnarvon 卿の死は、この王の墓を守るために神官が創り出した精霊（か呪い）によって引き起こされた可能性があると示唆した²²⁾。頭脳明晰でこの上なく理知的な名探偵 Sherlock Holmes を生み出した Doyle が古代エジプトの神秘主義思想に敬意を表するような発言をしたことに対して不安と疑惑を抱く人々が存在する。しかしながら探偵小説の先駆者 Edgar Allan Poe も Doyle と同じように怪奇的な幻想小説を創造し、仮に Poe の生み出した名探偵 Dupin が忘れられることがあるとしても、『アッシャー家の崩壊』や「黒猫」が世界文学史から消滅することはない。Doyle が後年、心霊主義に深く傾倒していたのは周知の事実であるので、作品の中に超常現象を扱ったものがあるのは少しも不思議でなく、既に述べたように、彼が錬金術や神秘主義哲学を高く評価していた点は見逃せないであろう。“Lot No. 249”と“The Ring of Thoth”は、前者が Sherlock Holmes 的な推理小説、後者が Poe 的な怪奇幻想小説とみなすことができる。しかし“imperial Gothic”の作家 Doyle は、古代の超常的な力が 19 世紀末の Victoria 女王の時代のイギリス社会に決定的な影響力を及ぼす所までは書いておらず、それが彼の文学の特徴であると捉えることができる。

Doyle の“The Ring of Thoth”をモデルとした作品に、パルプ・マガジン *Weird Tales* に掲載された Arlton Eadie 作“The Nameless Mummy”（1932 年）があり、この非常に興味深い短編小説ではミイラとそれを探し求める者の性が Doyle の小説とは逆になっており、不死者 Cleopatra が Mark Antony の傍らで永遠の眠りにつく²³⁾。ミイラを主題とした物語の中に Antony と Cleopatra の悲恋を取り入れた点で、この作品は Rice の *The Mummy* に創作上のインスピレーションを与えたのではないと思われる。

Rice が献辞の中で敬意を表しているもう一人の作家 Henry Rider Haggard (1856～1925 年) は、イスラエル、エジプト、アフリカ奥地、インカ帝国などを舞台とした冒険ファンタジー小説によって、同時代のイギリスの人々から絶賛されたが、幼少の頃から心霊学に傾倒し、超自然現象に魅惑されていたと言われる。彼の代表作 *She: A History of Adventure* (1887 年) の絶世の美女の主人公 Ayesha が Rice の *The Vamire Chronicles* に登場する古代エジプトの女王 Akasha のモデルであることは、名前の酷似からも、すぐ類推される。2000 年以上もの間、若さと美貌を保ちつつアフリカの奥地で愛する男の復活を待ちながら生き続けた古代の女王の情熱は凄絶なものである。この土地に住む Amahagger 族から「服従すべきお方」(She Who Must be Obeyed) と呼ばれ、畏れ敬われている彼女と従者たちは、エジプト人よりも前に優れた文明を築いた古代国家 Kôr の人々の地下墓地に住んでいる。紀元前 339 年頃、古代エジプトの Isis の神殿に仕える神官であった Kallikrates (彼はギリシャ人の血を引いている) は、妻帯を禁じる掟を破ってファラオの娘 Amenartas と恋に落ち、二人がエジプトを去ってアフリカ南東部の奥地に来たときに捕えられて Ayesha 女王のもとへ連れて行かれた。Ayesha は Kallikrates に激しい恋心を抱き、彼に、妻を殺して彼女とともに不死の身になるよう命じたが、彼が拒んだので、嫉妬に駆られて彼を殺してしまった。エジプトの神々に守護されていた Amenartas は生き延びることができ、夫の子を産んだ。一方 Ayesha は命の炎を浴びることによって永遠に近い長寿と若さを獲得した。彼女は Kallikrates の遺体を完全な状態で洞窟の奥に保存し、2000 年間、毎夜、その亡骸のそばで眠り、いつの日か彼が生まれ変わって自分のもとに戻って来ると固く信じ続けていた。そして Kallikrates と Amenartas の子孫に当たるイギリス人青年 Leo Vincey が彼の後見人である Cambridge 大学の特別研究員 Horace Holly とともに現われたとき、彼女は Leo を愛している Amahagger 族の娘を殺し、言語に絶する妖艶な美貌で Leo を誘惑する。Ayesha は、長い歳月の間、自分の悲しい慰めであったが、Kallikrates の生まれ変わりである Leo が自分のもとに帰って来た今となつては、もはや用がなくなった

(Kallikrates の) 見事なミイラを強力な酸で溶かして蒸発させる。その後彼女は、古代の火山の内部の洞窟で燃え上がる「命の炎」(“flame of Life”)を浴びて自分と同じように長い生命を得るように Leo に言う。だが彼が炎の中に入るのを躊躇したので、彼の恐怖心を和らげるために彼女は、まず自分が、もう一度、命の炎を浴びてみせようと告げる。ところが二回目に命の炎の中に入った結果、奇怪なことに、Ayesha は急速に老いさらばえ、醜く縮んだ姿となって死んでしまった。しかし彼女は、いまわの際に「私を忘れないでくれ... 再び私は戻って来るだろう。そして再び美しくなるであろう。」²⁴⁾と Leo に語った。

熾烈な愛を貫くためには手段を選ばず、自分に逆らう者の命を容赦なく奪う女王 Ayesha は恐ろしい魔性の女であるが、現世の曖昧模糊とした道義観念の彼岸に超然としている彼女が神々しい魅力を持っていることは否定できない。「生きるために毎日何かを殺している以上、我々の生涯は全て長い罪悪ではないか...これが悪で、あれが善であるとか、闇は憎むべきもので、光は愛すべきものだと言ってはならない。なぜなら自分の目には悪と見えるものが他者の目には善に見えるかも知れないし、暗闇が昼の光よりも美しいかも知れず、あるいは皆同じかも知れないからだ。」²⁵⁾という彼女の言葉には2200年間生きてきた者が悟った永遠の真実が含まれていることは間違いないであろう。

作者 Haggard が Ayesha に強く惹きつけられていたことは明らかであり、Ayesha のような常人を超越した神秘的な存在を彼に創造させた原動力の一つは、彼の精神的支柱であった心霊主義であったと推察される。だが、恋人の生まれ変わりと邂逅して愛の歓びを初めて知り、新しい人生を出発させようとしていたときに Ayesha が無残に滅び去るという結末を読めば、恋人を待ち続けるために生きてきた2000年余りの歳月は、彼女にとって結局は呪いに他ならなかったように思われる。いかに魅力的な女主人公であれ、Haggard が彼女を罰しなければならなかったのは、この小説が、Doyle の“Lot No. 249”と同様“imperial Gothic”の文学作品だからであろう。“Imperial Gothic”の代表作である Bram Stoker 作 *Dracula* (1897 年) や Richard Marsh 作 *The Beetle*

(1897 年)において異国の悪魔的な力が帝国主義的国家の中心地 London を脅かす様子が描かれているが、狡智に長けたルーマニアの伯爵の大なる野望も、イシス神殿の女祭司の復讐も、イギリス人によって阻まれる結果となる。*She* においてアラビア人の女王 Ayesha は Leo とともにイギリスへ行き、現女王を倒して自分が大英帝国の支配者となり、Leo とともに統治することを望んでいる。作者の分身である学者 Holly は、自尊心が強く野心的な Ayesha が死ぬことも殺されることもないなら、最終的には全世界の支配者になるかも知れないと考えて驚愕する。*She* の中で Ayesha が Victoria 女王に取って代わる²⁶⁾と宣言している箇所には、帝国主義とヨーロッパの植民地主義が脅かされることへの不安がみなぎっており、“imperial Gothic” 文学の特徴的要素を見出すことができる。そして同時代の多くのイギリス人と同じように、大英帝国のアフリカへの進出を、文明をもたらす高潔な計画とみなしていた Haggard にとって、Ayesha は滅ぼされるべき存在であった。

Haggard の *She* は、その後書かれたミイラ小説に非常に大きな影響を与えており、主人公が神官としての誓いを破ってファラオの王女との恋に落ちるという物語の形式を最初に考えたのは Haggard であるとされている。なお 1935 年に映画化された *She* (監督 Lansing C. Holden, Irving Pichel) で Helen Gahagan が演じた Ayesha は、1937 年に Walt Disney が制作した animation 映画 *Snow White and the Seven Dwarfs* (『白雪姫』) に登場する美しいが邪悪な女王のモデルになった²⁷⁾とされている。

【注】

- 1) Gary Hoppenstand, “Anne Rice’s Pastiche of the British ‘Thriller’: Comparing *The Mummy* to Sir Arthur Conan Doyle’s ‘Lot No. 249’” in Katherine Ramsland (ed.), *The Anne Rice Reader* (New York: Ballantine Books, 1997), p. 293., p. 297., p. 301.
- 2) Arthur Conan Doyle, “Lot No. 249” in E. F. Bleiler (ed.), *The Best Supernatural Tales of Arthur Conan Doyle* (New York: Dover Publications, Inc., 1979), p. 75., p. 85.
- 3) <http://mentalfloss.com/article/67423/9-strange-uses-ancient-egyptian-mummies> (November 6, 2016)

- 4) <http://education.blurtit.com/3864090/did-victorians-really-have-quotmummy-unwrapping-partiesquot> (November 6, 2016)
- 5) Roger Luckhurst, *The Mummy's Curse : The True History of a Dark Fantasy* (Oxford University Press, 2012), pp. 95-97.
- 6) *Ibid.*, p. 97.
- 7) Arthur Conan Doyle, *op. cit.*, p. 81.
- 8) *Ibid.*, p. 77.
- 9) *Ibid.*, p. 87.
- 10) *Ibid.*, p. 102.
- 11) Gary Hoppenstand, *op. cit.*, p. 291.
- 12) Arthur Conan Doyle, *op. cit.*, p. 111.
- 13) *Ibid.*, p. 111.
- 14) Patrick Brantlinger, *Rule of Darkness : British Literature and Imperialism, 1830-1914* (Ithaca : Cornell University Press, 1988), pp. 230-253.
- 15) Arthur Conan Doyle, "The Ring of Thoth" in E. F. Bleiler (ed.), *The Best Supernatural Tales of Arthur Conan Doyle*, p. 207.
- 16) *Ibid.*, p. 212.
- 17) *Ibid.*, p. 221.
- 18) *Ibid.*, p. 222.
- 19) *Ibid.*, p. 211.
- 20) *Ibid.*, p. 213.
- 21) <http://nautilus.us/issue/12/feedback/the-curse-of-the-unlucky-mummy> (November 6, 2016)
- 22) <http://www.historyembalmed.org/curse-of-king-tut/sir-arthur-conan-doyle-curse-of-king-tut.htm> (November 6, 2016)
- 23) Brian J. Frost, *The Essential Guide to Mummy Literature* (Lanham : Scarecrow Press, 2008), pp. 119-120.; Arlton Eadie, "The Nameless Mummy" (coquitlamweb-solutions.ca/sffaudio_can_pdfs/TheNamelessMummyByArltonEadie.pdf) (November 6, 2016)
- 24) H. Rider Haggard, *She : A History of Adventure* (Oxford World's Classics, 2008), p. 257.
- 25) *Ibid.*, pp. 183-184.
- 26) *Ibid.*, p. 225.
- 27) <https://web.archive.org/web/20110227222743/http://disney.go.com/vault/archives/villains/queen/queen.html> (November 8, 2016)

II *The Mummy* 創作の契機となった映画

Anne Rice が *The Mummy* の献辞の中で、彼女の小説と名高いミイラ映画

を結びつけた最大の理由は、もともとこの作品が短期連続テレビドラマの脚本として書かれたことに由来する。以前から独自のミイラ小説を發表したいと望んでいた彼女は、Hollywoodのプロデューサーたちに、巻き布から飛び出してきたミイラが美しくロマンティックな男性で、考古学者の娘との恋に落ちるという彼女好みのアイディア、いわば *Interview with Ramses*—彼女の大傑作 *Interview with the Vampire* のエジプト版—を売り込むのに成功した。彼女は直ちに脚本を書いたが、テレビ映画制作者側が徹底的な改作を求めたことに憤慨して、その企画から手を引き、大型ペーパーバックの書籍として出版する目的で、テレビ映画用の脚本を書き換えて小説に仕上げた¹⁾。彼女は「子どもの頃に好きだったB級映画の雰囲気 (atmosphere) を呼び起こして、他の作品では試みなかった途方もないことが行なえるのを楽しんだ」²⁾と述べている。ここで我々が忘れてはならないのは、時として批判されるように Rice が「金儲けのためのお粗末な作品」を書いたわけではないということである。彼女の意図は、巨額を投じて製作された豪華絢爛たる超大作のスペクタクル映画ではなく、Universal Pictures やイギリスの Hammer Film Productions が製作したような古典的怪奇映画の持つ独特の^{おもむ}趣きを尊重しながらも、彼女自身の小説でも伝統的スリラー映画でも描かれなかった画期的なファンタジーを創作することにあった。そこで、この章では Rice が *The Mummy* を創造する上で、明らかに大きな影響を受けたと推察される幾つかの映画について考察する。

全てのミイラ映画の中で古典的傑作とされているものは、1932年のUniversal映画 *The Mummy* (監督 Karl Freund, 主演 Boris Karloff) である。映画 *Dracula* と *Frankenstein* が1931年に大成功を収めた後、Universal Pictures は恐怖映画が更に大ヒットする可能性を持っていると感じ、Frankensteinの映画で人造人間を演じて人気を博した Boris Karloff が新しい作品でも活躍することになる。当時、Tutankhamun 王の墓が発見されてからまだ10年しか経っておらず、アメリカの一般大衆は依然としてこの事件に関心を抱いていたので、Universalの初期の恐怖映画制作者であった Carl Laemmle, Jr. は、墓の発掘に携わった人々にふりかかったと推測される「ファラオの呪い」を映画に

取り入れることを考え、Bohemia 出身でファンタジー映画に精通している Karl Freund が監督を務めることとなった³⁾。内容については、最初は古代エジプトの魔術師を主題としたものであったが、実在の人物 Imhotep を主人公とすることに変更された⁴⁾。Imhotep は第 3 王朝時代にファラオ Djoser に仕えた科学者・医師・建築家・書記官で、最初のピラミッドの考案者でもあった。主人公が追いつける恋人の名も歴史上の人物で Tutankhamun の妻である Anck-es-en-Amon にすることとなった⁵⁾。ここで我々は 1998 年の超大作 Universal 映画 *The Mummy* (監督 Stephen Sommers, 主演 Brendan Fraser) 及び 2001 年の *The Mummy Returns* (監督, 主演は同上) において、Imhotep と Anck-es-en-Amon が重要な登場人物である⁶⁾ことに着目する必要がある。そして 1932 年の映画 *The Mummy* の主題が数十世紀もの時間を超越した古代エジプト人の神官の愛である以上、Doyle の *The Ring of Thoth* が、この映画に極めて重要な影響を与えたことは言うまでもない。脚本を担当したのは 1931 年の Universal 映画 *Dracula* の脚本を書いた John L. Balderston であり、*The Mummy* が幾つかの重要な点で *Dracula* と似通っていることに留意すべきである。両方の映画の主な舞台はアメリカ一般大衆にとって遠く離れた異国情緒あふれる土地であり、*Dracula* も Imhotep も教養ある紳士で、現代に生きる若い女性を求め、不老不死の存在で、超自然的な力を駆使するが、超自然的な宗教的手段によって滅ぼされる。彼らの主要な相違は、*Dracula* は血への渴望を満足させるために行動するが、Imhotep の行動の動機づけとなるのは 4000 年間守りつづけてきた愛であるという点であろう。なお *The Mummy* の製作期間は 1932 年 9 月末から僅か 1 か月間で、野外撮影は California 州南部の Mojave 砂漠で行なわれた。

この映画のストーリーは次のようなものである。1921 年、Joseph Whemple 卿に率いられた大英博物館遠征隊は Karnak の神殿の祭司長 Imhotep のミイラを発掘したが、Muller 博士は Imhotep の眠りを妨げた者にふりかかる死の呪いを恐れる。一方、若い考古学者 Norton は好奇心を押さえ切れずに Thoth の神の巻き物を声に出して読んでしまった結果、ミイラを蘇らせることとな

り、その姿を見た Norton は恐怖の余り発狂し、Imhotep は巻き物を携えて姿を消す。それから 10 年後に Whemple 卿の息子である Frank 青年が発掘していたときに、神秘的なエジプト人 Ardath Bey と会う。Bey は発掘隊に Anck-es-en-Amon の墓の場所を教えるが、この男の正体はミイラから生き返った Imhotep で、4000 年前に死去した恋人を蘇らせることを計画していた。彼が生きながらミイラにされた理由は、彼の禁じられた恋の相手である王女が突然病いで亡くなった後で彼女を復活させようとしたからであった。王女の魂は転生を重ね、今は Helen Grosvenor の体に宿っており、Ardath Bey は超自然的な手段によって、この若い女性の意識を支配する。彼は自分と Anck-es-en-Amon の間に立ちはだかる全ての人を排除しようと試み、Whemple 卿に心臓発作を起こさせて殺害する。遂に Bey が Helen を自分自身と同じ不死者に変えるために命を奪う儀式を始めようとする、彼女の体に宿っている Anck-es-en-Amon の魂が目覚めて、神を冒瀆する行為を拒絶する。Helen の救出を Bey に妨げられた Frank と Muller 博士は、彼女の懸命な祈りを聞き届けた Isis の神像が Bey を滅ぼし、古代の巻き物を燃やすのを目の当たりにする⁷⁾。この映画の大成功の要因は何と言っても Boris Karloff の名演技であり、ゆっくりと目覚めて朽ちかけた巻き布の下で動き始め、Norton が一心不乱に読んでいる Thoth の巻き物に委びた手を伸ばす場面は鮮烈な衝撃を観客に与える。

次にイギリスの Hammer Film Productions が 1959 年に製作した *The Mummy* (監督 Terence Fisher, 主演 Peter Cushing, Christopher Lee) について考察する。Universal と同様、Hammer も Frankenstein と Dracula に焦点を当てた *The Curse of Frankenstein* (1957 年) と *Dracula* (1958 年) で大人気を獲得した後に、古代エジプトのミイラを主題とした映画を生み出した⁸⁾。1959 年の *The Mummy* は Hammer の 4 つのミイラ映画の最初の作品であり、主演した Peter Cushing と Christopher Lee は、*Dracula* で Van Helsing 博士と Dracula 伯爵を演じた名優である。

映画の内容は次のようなものである。1895 年のエジプトでイギリス人考古学者 Stephen Banning は弟 Joe (Joseph), 息子 John とともに発掘を行ない、

古代の王族の墓を発見したが、足に怪我を負っていた John は中に入れなかった。墓を冒涇する者には呪いがふりかかるであろうと謎のエジプト人 Mehemet から警告されたが、Stephen と Joe は、これを無視して墓に入り、Karnak の神殿の女祭司長であった王女 Ananka の石棺を発見した。この驚嘆すべき出来事を John に知らせるために Joe が出て行った間に、Stephen は一人だけで墓の中で Scroll of Life を読んでいるうちに気が変になってしまう。彼は祖国の病院に収容されることになり、John と彼の叔父は、邪悪なものが潜んでいるように感じられる墓の入口を再び閉じて帰国した。

それから3年後の1898年に、入院中の Stephen は息子と呼び寄せて、生き返ったミイラが自分たちを襲うだろうと警告した。John は精神に異常をきたしている父の言葉を信用しなかったが、実は、Ananka の墓の中で眠っていた Karnak の神殿の祭司長 Kharis のミイラが Scroll of Life を読む Stephen の声を聞いて蘇り、それを見た彼は恐怖の余り発狂したのだった。Kharis の時代から4000年後の19世紀の末に Karnak 神の神官長を務める Mehemet は、Ananka の墓に侵入した考古学者たちを罰するためにミイラを収めた棺をイギリスへ運んだが、棺を載せた馬車が彼の屋敷へ向かう途中で、運搬人の不手際から棺は沼に沈んでしまう。しかし Mehemet は巻き物の魔法の言葉を唱えて、沼に沈んだ Kharis のミイラを目覚めさせ、王女の墓の神聖さを冒涇した者たちへの復讐を果たすように命じる⁹⁾。

Kharis は、まず第一に精神病院の隔離室で怯えている Stephen を襲い、絞殺して立ち去る。叔父の Joe とともに父の謎の死について調べていた John は、Kharis の伝説について叔父に語る。すなわち Kharis は密かに王女 Ananka を愛していたが、彼女は Karnak 神に仕える身であったので、これは禁じられた恋であった。彼女が突然死去したとき、Kharis は祭司長としてその葬儀を執り行なった後に、Karnak 神への彼女の献身の義務は生前だけであると解釈して、彼の恋を成就させるために王女を蘇生させようと決心し、Scroll of Life を読み始める。しかし Kharis はこの行為を行なっているときに捕らえられ、舌を切られて^{おし}唾にされた上、生きたままミイラとして葬られ、永遠に王女

の墓を守り続けるよう宣告されたのだと語り継がれてきた。

Joeはこの伝説を fairy story だとして全く信じなかったが、屋敷に侵入した Kharis に襲われて殺され、これを見た John は至近距離から弾丸がなくなるまでピストルを撃ったが、ミイラは逃亡した。John の叔父と父の殺害を捜査していた Mulrooney 警視は目撃者である John の話に対して懐疑的であったが、付近の住民からの情報を聞くうちに、蘇ったミイラが存在する可能性について考え始める。

Mehemet Bey は最後の犠牲者 John を殺すようミイラに命じたが、John の妻 Isobel が夫を助けるために走り寄ったとき、ガウンを着て長い髪を垂らした彼女が王女 Ananka に酷似していることに動揺した Kharis は、John の体を放して立ち去る。ミイラを操って父と叔父を殺させた犯人が Bey ではないかと推理した John は、Mehemet の家を訪れる。顔色一つ変えずに宿敵をもてなしながらも、Karnak 神の敬虔な信者である Mehemet は、西洋の考古学者たちが古代エジプトの王族の墓を発掘する行為はそこに眠る人々の霊の神聖さを冒瀆する行為に他ならないと厳しく John を糾弾する。西洋の帝国主義者たちによって誇り高い古代人の墳墓が汚され自国の文化遺産が強奪されて精神的支柱が揺るがされることへの怒りを表現した Mehemet Bey の言葉は痛切な響きを持っている¹⁰⁾。そして Hammer のミイラ映画第3作 *The Mummy's Shroud* (1966 年、監督 John Gilling) において、エジプトで古代人の墳墓の発掘を行なった西洋の人々は、死者の霊を冒瀆した罪を心から悔いるべきではないかというメッセージが最も明確に表現されることになる。Mehemet は、客人に暴力を振るうのは礼節に反すると心得ているため、自宅で Kharis に John を襲わせることは差し控える。しかし John を帰宅させた後で Mehemet は Kharis を呼び起こし、Karnak 神の像の前で務めをやり遂げることを誓ってから、今度は彼自身も一緒に Banning 邸に向かい、彼らは屋敷の外で見張りをしていた警官たちを倒した後、邸内に侵入する。Kharis は書斎で銃を携えて待ち構えていた John を絞殺しようとするが、再び Isobel に妨げられる。だが、このときの彼女は髪を結い上げ、19 世紀の上流婦人らしい服装だった

ので、Ananka との類似性が幾分ぼやけて見えた。そこで John は “Isobel... your hair!” と絶叫し、それを聞いた彼女は急いで髪を下ろし、権威者らしい断固たる口調で Kharis に John への攻撃をやめるように命じた。Mehemet は Kharis に Isobel を殺すよう命じるが、Kharis が従わなかったので、彼自身で彼女を刺し殺そうとする。だが Kharis は Isobel を救うために Mehemet を殺し、その後で、恐怖のため気を失ってしまった彼女を抱き上げて沼へ向かう。巻き物も携えた Kharis は、それを用いて再び蘇り、Isobel を自分が愛する Ananka として復活させるつもりであった。John は妻を助けるために警官たちとともに追跡し、意識を失ったまま沼の深みへ運ばれて行く妻を目覚めさせようとして、彼女の名を呼んだ。我に帰った Isobel は Kharis に自分を下におろすよう命じ、彼は不承不承ながらも、それに従う。彼女が Kharis から離れるやいなや、追っ手は一斉射撃を開始し、手に巻き物を握り締めたミイラは沼の底に沈んで行った¹¹⁾。

この映画はイギリスの恐怖映画の最高傑作と絶賛され、観客の心を引きつけるストーリーと巧みな性格描写が高く評価された¹²⁾。名優 Peter Cushing が知的で冷徹な英国紳士を完璧に演じたことは言うまでもなく、性格俳優 Christopher Lee は一言も発せず、目の表情と体の動きだけで、恐ろしくも哀愁の影を引きずるミイラを見事に演じて¹³⁾、観客を魅了した。映画に登場する人物の中で真の悪人は一人もおらず、それぞれが宿命に苦しみながらも懸命に生きようと努力している点においても、文明や学問が人間の魂の尊厳を傷つけることは許しがたい罪ではないかと問いかけている点においても、1959 年の *The Mummy* は映画史上、稀に見る傑作と呼んでも差し支えないと感じられる。

Rice が彼女の小説 *The Mummy* の中で取り上げている主題と非常によく似たテーマを扱っている映画は Hammer が 1964 年に製作した *The Curse of the Mummy's Tomb* (監督・脚本 Michael Carreras, 主演 Terence Morgan) である¹⁴⁾。David Huckvale は、Rice がこの映画の登場人物 Adam Beauchamp から手がかりを得て *The Mummy* を創作したのではないかと指摘しており¹⁵⁾、この一見単純に見える 78 分の映画のストーリーには、実は幾つかなの特筆すべ

き要素が含まれている。

ストーリーは、1900年のエジプトで Ra-Antef（架空の人物であるが、映画では RamessesⅧ世の息子に当たる王子とされている）の墓が発見されるが、古代の王族の墓の神聖さを汚した罪により、考古学者のリーダー Dubois 教授が砂漠の住民たちに惨殺される場面から始まる。この身の毛もよだつ事件にもかかわらず発掘の出資者 Alexander King は、発見された遺物を携えて世界を回って金儲けする計画を発表する。King は P. T. Barnum（サーカス王として名高いが、1842年、New York City にエンターテインメント性に富んだ博物館 Barnum's American Museum をオープンし、アメリカ大衆文化の発展に貢献した）を思わせる興行師で、僅か10セントの入場料でスペクタクルと知識を一般大衆に提供することで財を築こうと企てていた¹⁶⁾。彼の計画に対してエジプト政府の役人 Hashmi Bey（この役を演じているのは1959年の *The Mummy* で Kharis を蘇生させたエジプト人の神官に扮した George Pastell である）と謹厳な考古学者 Giles Dalrymple 卿は異を唱えるが、King は無視する。Dalrymple 卿よりも年の若い考古学者 John Bray は殺された Dubois 教授の娘 Annette と婚約しているが、John と Annette は控え目に King に同意する。イギリスへ戻る船旅の途中で Dalrymple 卿と John は何者かに襲われるが、Annette は危うい所を謎の男 Adam Beauchamp に救われる。Beauchamp は美しい彼女に好感を抱くとともに Ra-Antef に強い関心を寄せ、考古学者たちに、自分のイギリスの屋敷に滞在するよう勧める¹⁷⁾。

King が報道関係者にミイラを見せる準備を行なっているときに Annette は Beauchamp に Ra-Antef と彼の弟 Be の生涯について語る。彼らはファラオ RamessesⅧ世の息子で双子の兄弟であったが、Ra は英知と真理の探求者であり、Be は現世的欲望の追求者であった。Ra は彼を深く崇拝する砂漠の遊牧民たちから偉大な力を持つメダルを贈られる。Ra を妬み憎んでいる Be は兄の暗殺を謀り、刺客たちは Ra の亡骸から左手を切断して、殺害の証拠として Be に届ける。兄弟の父王は Ra 暗殺を知ると、Be に永遠の呪いをかけたと伝えられている。Annette の話を聞いていた Beauchamp は穏やかな態度を一変

させて、発掘隊がそのメダルを見つけたのか詰問する。Annette は発見されなかった筈だと否定するが、Beauchamp に不審の念を抱く。実は Annette の父は殺される直前にこのメダルを娘に与えていたのだった。John が Dalrymple 卿の書斎でそれを調べていたときに何者かに襲われ、メダルを奪われてしまう¹⁸⁾。

報道関係者を対象とした King 主催のショーが行なわれたときに棺からミイラが姿を消していることが分かり、会場は騒然となる。そしてその夜、霧の中を歩いてホテルへ戻る途中で King は蘇った Ra-Antef のミイラに遭遇して絞殺される。続いてミイラは Dalrymple 卿の書斎の窓を壊して乱入し、身を守るためにピストルの弾丸を撃ち尽した老考古学者の頭骸骨を打ち砕く。次にミイラは Beauchamp の屋敷で彼を絞殺しようとするが、彼と恋仲になっている Annette に気をそらされて彼の体を放し、警官隊と John が到着したときには姿を消している。恐怖のために失神していた Annette は意識を取り戻し、Beauchamp が命をとりとめたのを知って安心するが、John は何故ミイラが彼を襲ったのか訝しむ^{いふか}。死亡した Dalrymple 卿の屋敷には John を襲いに来る筈のミイラを捕獲するための罠が仕掛けられるが、難なく抜け出した Ra-Antef は、不敬な行為についてひたすら謝罪しているエジプト人 Bey の頭を残酷に踏み潰して立ち去る¹⁹⁾。

裕福な紳士であるが謎に包まれた Beauchamp は恋人 Annette を古代エジプトの貴重な遺物で満たされている地下の「博物館」へ連れて行き、遂に自分の正体を表わす。ミイラとなっている兄 Ra-Antef を暗殺したのは自分であり、兄弟の父は、死んだ兄自身が弟の生命を終わらせない限り Be が永遠に生き続けるように呪いをかけたのだと Beauchamp は語った。ミイラを生き返らせる魔法の言葉 Words of Life が刻まれているメダルを奪って Ra-Antef を蘇らせたのは Beauchamp であったが、それは墓を冒涇した人々を兄に殺させるだけでなく、更に重要なことには、長生きすればするほど悲惨になって行く彼自身の人生を終わらせるためであった。Beauchamp は墓を冒涇した Annette と兄を殺した自分の両方をミイラに殺させ、死によって呪いから解放された自分

が Annette とともに来世で永遠に結ばれることを切望していた。だが Beauchamp の企ては John と警官たちに阻止され、逃亡のさいに金属製の扉にはさまれた右手が切断されるが、彼は Annette をかかえたミイラを先導して、地下の下水道へ逃れる²⁰⁾。Beauchamp は戦争、悪疫、飢餓、同胞への残酷な仕打ちを目の当たりにしてきた自分の 3000 年間の生涯がいかに惨めなものであったかを語り、Annette に死を恐れぬようにと説く。この場面での Terence Morgan の迫力は Shakespeare 劇の名優に匹敵し、個性的な悪役を演じ続けてきた彼の面目躍如たるものである。当然ながら Annette は “I want to live!” と叫んで Beauchamp の申し出を拒む。Beauchamp (Be) から彼女を殺すよう言いつけられた Ra-Antef は弟の命令には従わず、彼女を刺し殺そうとする弟を殺す。こうして Be (Beauchamp) は、彼の兄の手によって、彼が切望していた死を獲得する。Ra-Antef は、Annette の首に Be がかけたメダルをもぎ取って去って行くが、地下道の石の天井が崩落して、彼の体は水中に没して行く。

この映画はまずまず好評を博したものの、Hammer の前作 *The Mummy* には及ぶべくもなかった。製作スタッフは前作と同様に傑出していたが、脚本・監督・制作の三役を果たした Michael Carreras には映画の魔術を生み出すことができなかったと言われている²¹⁾。何度も注意深く鑑賞すると Carreras の趣旨が非常に意義深いものであったと理解できるのだが、78 分という短時間で極めて深遠なテーマを追求することが不可能であったように感じられる。しかし、この映画は蘇ったミイラが破壊と死をもたらす有様を見せ場とした標準的なミイラ映画とは明らかに異なる点に注目する必要がある。一見単純そうに見えるこの映画のタイトルの “curse” とは、映画の前半で興行師 King が熱弁をふるっていたミイラの墓を暴いた者たちへの呪いだけではなく、Be の父が Be にかけた永遠の生命の呪いをも意味している。そして映画のクライマックスにおいて最も重要な意義を持つのは死の呪いではなく、生の呪いである²²⁾。「不死の生にこめられた呪い」という主題をこれ以前の大衆芸術で追求した最も顕著な例は、既に指摘した通り Conan Doyle 作 “The Ring of

Thoth”であり、この小説が1932年の映画 *The Mummy* (Boris Karloff 主演) に靈感を与えたことは歴然としている。しかしながら発掘されたばかりの自分の恋人のミイラの副葬品すなわち己の生命を終わらせる毒が隠されている指輪を手に入れるまで永遠に生きるよう運命づけられた古代の男の悲劇を描いた Doyle の物語は、1932年の映画よりも1964年の映画と類似していることに注目すべきである。更に Anne Rice が彼女の小説の主人公 Ramses を「呪われし者」と呼んだのは彼の「不死の生命」を勝利と至福の象徴であると同時に、この上ない苦悩と悲慘の象徴になる可能性があるとみなしたからであろう。

【注】

- 1) Gary Hoppenstand, *op. cit.*, p. 293-294.
- 2) Katherine Ramsland, *Prism of the Night: A Biography of Anne Rice* (New York: Plume, 1994), p. 320.
- 3) Susan D. Cowie and Tom Johnson, *The Mummy in Fact, Fiction and Film* (Jefferson: McFarland, 2002), pp. 60-61.
- 4) David Huckvale, *Ancient Egypt in the Popular Imagination: Building a Fantasy in Film, Literature, Music and Art* (Jefferson: McFarland, 2012), p. 12.
- 5) Susan D. Cowie and Tom Johnson, *op. cit.*, p. 61.
- 6) June Pulliam, “*The Mummy* (1999) and *The Mummy Returns*” in Matt Cardin (ed.), *op. cit.*, p. 262.
- 7) Susan D. Cowie and Tom Johnson, *op. cit.*, pp. 62-63.; David Huckvale, *op. cit.*, pp. 12-14.
- 8) David Huckvale, *op. cit.*, p. 31.
- 9) Susan D. Cowie and Tom Johnson, *op. cit.*, p. 88.; Peter Bebergal, “*The Mummy* (1959)” in Matt Cardin (ed.), *op. cit.*, pp. 260-261.
- 10) David Huckvale は、この場面でのエジプトの神官 Mehemet Bey と考古学者 John Banning の激しい論争を、この映画の中で最も興味深いものの一つと見なしており、傲慢で狭量な大英帝国の密使ともいうべき Banning を非難し、Bey が観客の共感を得るような脚本を Jimmy Sangster が書いたと指摘している。古代エジプトの遺跡発掘の是非について、劇中で、これほど真摯に討論されている映画は類例がないと思えるので、*The Mummy* (1959 年) が大衆文化史に残した足跡がいかに意義深いかを熟考する必要があるであろう。David Huckvale, *op. cit.*, p. 33.
- 11) Susan D. Cowie and Tom Johnson, *op. cit.*, p. 90.
- 12) *Ibid.*, P. 95.
- 13) *Ibid.*, pp. 92-93.
- 14) Carter Lupton, “Hammer Films mummy series” in Matt Cardin (ed.), *op. cit.*,

p. 159.

- 15) David Huckvale, *op. cit.*, p. 186.
- 16) Carter Lupton, *op. cit.*, p. 159.
- 17) Susan D. Cowie and Tom Johnson, *op. cit.*, pp. 96-97.
- 18) *Ibid.*, p. 97.; Carter Lupton, *op. cit.*, p. 160.
- 19) Susan D. Cowie and Tom Johnson, *op. cit.*, p. 97.
- 20) Carter Lupton, *op. cit.*, p. 160.
- 21) Susan D. Cowie and Tom Johnson, *op. cit.*, p. 98.
- 22) Carter Lupton, *op. cit.*, pp. 160-161.

Ⅲ 現代に蘇った古代人の愛と苦悩の物語としての *The Mummy*

Anne Rice 作 *The Mummy* は 1914 年にイギリス人考古学者 Lawrence Stratford が Cairo 南方の荒涼たる丘で盗掘の被害に遭ったことのない古代人の墓を発見した場面から始まる。墓の扉板のヒエログリフには、そこに眠っているのは「呪われし者 Ramses... 上下エジプトを治めた大王、ヒッタイト人たちを殺し、数々の神殿を建てた者」¹⁾ であると記されており、墓の主の眠りを醒まして怒らせぬようにと警告してあった。*The Mummy* の冒頭で考古学者たちが古代エジプトの王族の墓を暴く者は罰せられるであろうと警告している碑文を読んでいる場面は本稿の第Ⅱ章で取り上げた典型的なミイラ映画と共通しているので、我々は Rice が読者にとって親しみ深い雰囲気の中で物語を繰り広げるために、意図的に、このような描写から彼女の作品を開始させたのだと推察できる。

だが一般に Ramses (Rameses) 大王の遺骸は Cairo 博物館に収められていると知られている上に、Lawrence が発見した墓の碑文は、その主が「偉大な女王 Cleopatra が亡くなり、エジプトがローマの属州の一つとなった年に、自らを永遠の闇に委ね」²⁾ たのだと告げていた。Lawrence と彼の有能なアラブ人の助手 Samir Ibrahim は、Cleopatra は Ramses II 世の治世の 1000 年以上も後の女王であるのに、碑文が Ramses II 世の時代の第 19 王朝のヒエログリフで書かれており、同じ内容がギリシャ語とラテン語でも記されていることに困

惑した。Lawrence は驚嘆すべき発見の興奮を助手の Samir と分かち合ったが、押し寄せるカメラマンや新聞記者たちが研究や思索を妨げることに苛立っていた。遂に墓の内部に入った彼は、そこがいわゆる墓ではなく一種の書斎であるのに気づき、机の上にあるグレコ・ローマン様式の大大理石の胸像の台座に CLEOPATRA と刻まれているのを見た。彼はミイラを収めた棺を壁に立てかけ、黄ばんだ巻き布に包まれた痩せた顔を見つめた。ここで注目すべきことは、Rice が創造した考古学者 Lawrence は悪名高い “Mummy Parties” に参加した Victoria 女王時代の人々のような複雑な感情を持ってミイラの解包を望んでいるのではなく、古代の王者—偉大なる Ramses—への純粋な尊敬と憧憬の念を抱いているという点である。Rice 以前の作家や映画制作者で、ミイラに対してこのように暖かな人間的感情を抱いて接した芸術家は皆無に等しかったように私には思われる。Lawrence がうやうやしく亡骸に触れたとき、彼は不可思議な弾力性があることに驚嘆し、世界を揺るがすようなこの偉大な発掘作業の中で幾度も感じたように、賢い一人娘 Julie に自分の発見したものを示せてやれたら良いのにと残念に思った。もともと Stratford 海運の経営者であった彼は、会社の経営を弟の Randolph に押しつけ、若い頃から情熱を傾けていたエジプトの遺跡発掘に没頭する余生を送っていた。Randolph の放蕩息子で賭博と酒で堕落しきった Henry が自分に署名させるための書類を携えているのを見るのは、彼にとって苛立たしい限りだった。Randolph は Lawrence に会社の株の売却を承認させ、その金を Henry の負債の弁済に充てようと考えて、息子に書類を持たせて兄のもとへ行かせたのだった。Lawrence の愛娘 Julie は父に同行する予定であったが、婚約者 Alex Savarell に引きとめられてイギリスに残っていた。Alex の父親は Lawrence の若き日の親友の Elliott Savarell で、彼は Rutherford 伯爵という称号は持っていても経済的には没落しており、息子が Julie と結婚できれば Stratford 家の巨額の富を手に入れられると期待していた。Oxford 大学の学生時代に Lawrence と恋愛関係であった Elliott は考古学への情熱を彼と分かち合っていたのだが、Lawrence は会社を引退してエジプトへ渡り、そのような理想的な生き方を Elliott は羨

んでいた。Elliott は裕福なアメリカの女相続人 Edith Christian と結婚して息子をもうけ、自分たちの上品で因習にとらわれた生活の維持に汲々としていた。体の衰弱に悩まされている 55 歳の Elliott は、25 歳の息子が Stratford 財閥の後継者となる 21 歳の Julie と結婚してくれることを望んではいたが、賢明で独立心に富んだ彼女が善良で心優しい Alex を本当に愛しているのか確信が持てなかった。Alex は大使館で開催された舞踏会で Julie と踊りながら、いかに彼が彼女を愛しているか告げ、彼女が父とともにミイラを発掘したいなら自分も一緒にエジプトへ行っても構わないし、婦人参政権を求める行進をしたのなら彼女と並んで行進しようと語った³⁾、と述べられている。この部分の描写から作品の舞台となっている時代背景が明らかとなる。Julie は婚約者に自分が婦人参政権論者で、本来は探検家か考古学者であるべきなのだと述べ、今は結婚する意思がないのだと告げる。Bram Stoker は *Dracula* や *The Jewel of Seven Stars* の中で、しばしば批判的な態度で “new woman” に触れている⁴⁾ が、Julie Stratford はまさしく new woman そのものであり、社会における女性の権利の拡張を求め、結婚によって男性に束縛・支配されることを忌み嫌い、Alex を愛しながらも何故か心が満たされなかったと作者 Rice は強調している。Victoria 女王時代の多くの男性が “new woman” の勢力が社会秩序や伝統的価値観を脅かすことに対して不気味さや危機感を覚えていたと伝えられているので、“new woman” の典型である Julie の自由な生き方を礼賛する Rice の書き方が imperial Gothic の作家たちとは対照的である点に注目すべきである。

Ramses の書斎を調べていた Lawrence は、この大王が 1000 年間に渡ってエジプトの国王と女王の守護者であり、Cleopatra の師であるとともに彼女の恋人であったとパピルスに書き残していることに驚嘆した。不死の男 Ramses は愛する Cleopatra が死んだときに、自らの呪われた生命を終わらせるために、彼女が命を絶つ目的で奴隷たちに試していた毒薬を飲んだが死ぬことができなかったと記していた。彼は自分の亡骸を屍衣で包むように、しかしミイラを作るための防腐処置を施さず、遺体の心臓と脳を遺体から取り出さぬように

召使たちに命じてあった⁵⁾。従って召使たちは毒薬で意識を失っている Ramses の体を布でくるんで棺の中に生きたまま葬り、碑文を記した扉で墓で封印したのである。

Lawrence はふり注ぐ太陽光線を浴びたミイラが少しずつ人間らしい輪郭を帯びてきたのに気づいた。彼は 1000 年間生きてきたと主張する男のミイラに向かって「今は 1914 年です。偉大な王よ。そして Ramses 大王の名も、あなたが愛した最後の女王の名も、今なお全世界に知られています。」⁶⁾とラテン語で話しかけた。そして「あなたが不死の身でさえあれば、目を開けてこの現代世界 (modern world) を見ることができさえすれば、あなたの顔を見るためにその粗末な巻き布を外す許可を待つ必要さえなければ良いのだが！」⁷⁾と語った。彼が 20 年前なら解包には何の公的な許可も必要なかったのにと悔しがつているように 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての時期には、博物館関係者以外の一般人が私的に「科学的デモンストレーション」と「娯楽」を目的としてミイラの解包を行なうことに対する規制が厳しくなってきたのだと理解できる。但し、さきに述べたように Lawrence の場合には、“imperial Gothic” の登場人物たちとは異なり、一人の謙虚な人間として、古代の偉大な英雄に会いたいという切望から、不思議な生命感が宿っているミイラの巻き布をはがしたいと願ったのであった。彼は自分が発見した墓やミイラに対する権利を博物館に渡すよう要求する役人が数時間以内に來るだろうと考えて、焦燥に駆られていた。

突然 Ramses の書斎に入ってきた Henry は、ラテン語でミイラに話しかけている伯父をミイラの呪いで発狂したのではないかと嘲ったが、Lawrence は気にもせず、現代の世界には数多くの驚異的な事物が存在し、見せてあげられたら良いのと思う余りにも多くのものがあるとラテン語で古代の帝王に語っていた。一方、自分の墮落ぶりを Lawrence から厳しく叱責された Henry は、その部屋のアラバスターの壺の中には Cleopatra の毒薬が入っている⁸⁾と知ると、召使が運んできたコーヒーの中にそれを入れて、伯父に飲ませた。そして彼は毒殺した伯父の筆跡をまねて、持ち株を売却する書類にサインし、更に

Cleopatra にちなんだ貴重な金貨を盗み、伯父が突然倒れたので衝撃を受けているふりをして Samir を呼んだ。だが彼は自分の犯罪をミイラが巻き布の下から見つめているような気がした⁹⁾。

Lawrence の亡骸は生前の希望通りに、何の葬儀も行なわれずに Cairo に埋葬されたが、Julie の決断によって、彼が発掘したミイラと秘宝の全ては大英博物館に引き渡される前に、彼女の父が常に行なっていた通りに、London の Mayfair の屋敷で展示されることになった。Lawrence が生前エジプト室 (Egyptian room) と呼んでいた書斎で展示の準備をしていた人々が帰った後で Julie は父の書き残した日記を読み、Ramses と名乗る男がヒッタイトの女祭司から奪った呪われた霊薬を飲んで以来、不老不死の身となった後、自分を眠りから目覚めさせた Cleopatra を教え導き、彼女を愛したとパピルスに記していることを知った。「我々の人生とは平凡な世俗的悲劇に囲まれて揺籠から墓場まで進んで行くものであり、超自然現象の輝きというものは物語や詩や Shakespeare の演劇の中にしか存在しない」¹⁰⁾ のだとしても超自然的な事柄に魅了されたいという Julie の願いや彼女の父 Lawrence が Ramses のミイラに対して感じていた不思議な抑えがたい情熱は、Victoria 女王時代の人々や imperial Gothic の登場人物の心境とは異なっており、Rice は決してミイラをテーマにしたイギリスの作家たちの小説の主旨を模倣してはいない。Imperial Gothic において、支配されるべきもの、不可解で邪悪なもの、キリスト教的な倫理観を揺るがす危険なもの、と繰り返し描かれてきた古代エジプトのミイラに対して Julie は「Cleopatra のために目覚めたように、私のために目覚めて下さいませんか？あなたの愛した女王は死んでしまったとしても、言葉では言い表わせない驚異的な事柄に満ちた新しい世紀のために目覚めて下さいませんか？」¹¹⁾ と思慕の情をこめて語りかける。更に Julie と Elliott は、Lawrence の優れた助手であったアラブ人エジプト学者 Samir を、欧米的価値観とは異なる文化の中では気高い王子とみなされるだろうと純粋な敬意を抱いており、imperial Gothic の作家のような白人優位主義の人種的偏見を全く持っていない点にも注目すべきである。

現在 32 歳のハンサムな Henry は将来を嘱望された若者であったが、賭博と飲酒で墮落の一途を辿っており、10 年ほど前に Elliott と恋愛関係に陥った事実を彼を脅迫する材料に使おうとして失敗した。Henry は London と Cairo に情婦を持っており、無頼漢 Sharples に多額の借金があった。Sharples から返済を迫られたときに Henry は衝動的に相手をナイフで刺し殺し、相手の金を奪った。かつては深く敬愛していた伯父を毒殺した後、道徳的に完全に墮落し切って破滅への道を歩んでいた Henry は、子供の頃から妹のように仲が良かった従妹 Julie から会社の金の横領を責められたときに、彼女に対して突然の殺意を抱く。彼は「婦人参政権論者の小さな考古学者」¹²⁾ が自分でビジネスを取りしきり、父 Randolph と自分を会社から追い出そうとしていると懸念して、伯父の殺害に用いた Cleopatra の毒薬をコーヒーの中に入れて Julie に飲ませようとした。だが、このとき Ramses が棺から歩み出て Henry の首を締めようとしたので、彼女は命を救われた¹³⁾。大衆文学作品や映画の中で、多くの場合、破壊的な怪物として否定的に描かれる「蘇ったミイラ」が、正義を貫き、悪を懲らしめ、人の生命を助けるために闘っているのは注目に値する。陽光を豊富に浴びたために徐々に生命力を回復した Ramses は、Henry が Julie にコーヒーを勧めたときの言葉をそのまま繰り返す、次に、逃げ去った Henry が残していったハンカチの中にあった白い粉の毒薬を彼女に示した。父が Henry に毒殺される現場をミイラが目撃し、Henry は自分をも毒殺しようとしたことを知った Julie は強い衝撃を受けるが、彼女は蘇った男が素晴らしく美しく、知的な青い瞳で自分を見つめている様子に心を奪われる。Bette B. Roberts は「遺骸を覆っていた腐った亜麻布から埃が立ちのぼる中を、腕を前方に伸ばして弱々しく足をひきずるような足取りで動いて行く」¹⁴⁾ ミイラが Henry を締め殺そうとする有様は無数のミイラ映画の場面を典型的に再現させたものであると指摘している¹⁵⁾ が、罪の無い人間を救うために蘇ったミイラが朝日の射し込む温室の中で巻き布を引き裂いて、美しい顔を覗かせる場面の Rice の描写¹⁶⁾ にこそ着目すべきであろう。

Julie にはミイラから生き返ったこの男が怪物とは正反対の、神のように気

高い存在に思われ、Lawrence の親友のエジプト学者 Reginald Ramsey であると皆に紹介する¹⁷⁾。そして 2000 年の眠りから完全に醒めた Ramses を彼女は暖かくもてなすが、彼の余りの食欲に驚かされる。だが永遠の生命を持つ彼は、食物を吸収するのと同じ早さと貪欲さで知識を身につけ、驚くほどの速度で英語を習得し、本や雑誌や新聞を読んでいた。Julie は Ramses 大王に 20 世紀の世界を見せ、この尊敬すべき客人を教育するために London の街を案内するという一大冒険旅行を思い立ち、彼を、新聞社、様々な店、写真館、映画館、Victoria 駅、Westminster 寺院、Hyde Park、Stratford 海運の事務所、Hotel Victoria などへ連れて行った。彼女は、産業化が進み、汚染されつつある大都市を古代人がどのように思うかを訝しんだと述べており、20 世紀初頭のイギリスの都市問題が示されている。

彼（Ramses）はどう感じただろうか—煉瓦造りの建物が聳え立ち、路面電車がゴロゴロと音を立てて走り、自動車が排気ガスを噴出し、沢山の黒い二輪馬車や辻馬車が全ての通りにひしめく、この過度に成長した首都を.... 街路そのものが余りにも煙だらけで暗くなり、昼間に空の自然の光が差し込まないので、一日中電灯をつけている小さな店々を、彼はどのように理解しただろうか？¹⁸⁾

だが、楽観的で進歩主義な賢明な Ramses は怯むことなく新しい社会の全てに魅せられ、全てを愛したと述べられている。周囲の人間や事物に対して純粋な好奇心を抱く彼は、優雅な物腰や気品ある態度で会う人々全てを魅了し、時代や場所に関わりなく、この人は王なのだと Julie に感じさせる。London の街の様々な場所を訪れた後で、Ramses は、産業化された現代社会は貧しい人々にも幸せをもたらしたが、貧しさが完全に根絶されることはなく、「貪欲」が人の世の不幸の源となることも数千年経っても変わっていないと語る¹⁹⁾。Ramses から、Lawrence は宝を掘り当てるためにエジプトへ行ったのだろうと言われたとき、Julie は自分の父親は学者であって墓泥棒ではなかったのだ²⁰⁾

と説明している。彼女は蘇った Ramses に情熱的な愛情を感じ、彼の魅力に抵抗できない自分に驚いていたが、父を殺し、彼女自身も抹殺しようとした従兄 Henry を罰しようとする彼に対しては明確に異を唱えた。この日の London 巡りで Ramses にとって不快さを覚えた唯一の場所は Madame Tussaud の蠟人形館であり、蛇の牙に胸を噛ませようとしている Cleopatra の人形を見たときに、彼の熱愛した女王に対する 20 世紀の人々の解釈に耐えられず、怒りをあらわにした²¹⁾。この描写から冷静で賢明な Ramses の心には今なお Cleopatra への情熱的な愛が生き続けていると推察できる。Julie は最後に、閉館してから数時間経ってはいたが、Ramses を大英博物館へ連れて行った。もし Ramses が生き返らなかったなら、彼はミイラとして、そこに収納される運命であった。彼は Cleopatra の遺体が大英博物館にあるのか Cairo 博物館にあるのか知りがっていたが、Julie は Alexandria にあった筈の彼女の大霊廟の痕跡さえ見つからないのだと答えた。彼女は Ramses を「美しく強い男、自分たち皆と同じように苦しむ人間」²²⁾とみなしており、彼にエジプトへ戻って、あの古い世界を自分自身で見る必要はないのかと思いやり深く尋ねている。一日中行動をともにして Julie への親愛の情を深めた Ramses が彼女を突然抱き上げて「体の軽い小さな女王だ。」と言ったときに「偉大な王よ、私の体を下ろしなさい。」と彼女が命じている箇所は²³⁾、明らかに 1959 年の名画 *The Mummy* で、王女 Ananka に生き写しの Isobel がミイラから蘇った Kharis に「私の体を下ろしなさい。」と威厳をこめて命じた実に印象深い場面から Rice がヒントを得たと推察される。Ramses は Julie をそっと地面に下ろすと恭しくお辞儀をし「かつて Britannia の名で知られていたイギリスの London の地にある Mayfair 地区の Stratford 宮殿に住む女王」²⁴⁾に敬意を表していた。

帰宅した二人を出迎えた Samir は、初めて Reginald Ramsey と名乗る男と会った。彼はミイラの巻き布の間から見えていた Ramses 大王のカルトゥーシュが刻まれたルビーの指輪を相手のはめているのに気づいたときに、その正体を知った。Julie の身が安全であるか気づかっている Samir に向かって Ramses は古代エジプト語で「この女性は私に愛されている以上、全ての危害から

守られるであろう。」²⁵⁾と語った。Samir は Lawrence が毒殺されたことさえ暗示する極めて不思議な男を知ったことで、苦痛と喜びが混じり合う奇跡を経験した。彼に強く魅了された Samir は去りぎわに、自分が毎晩大変遅くまで大英博物館内のオフィスにいたので、もし自分を必要とする場合には使いをよこしてほしいと告げて名刺を渡した。その後で Ramses は不死身の自分には睡眠は必要なく、食べ物も飲み物も不要なのだが、単に渴望し、体がそれらを楽しむので摂取するのだと告げて Julie を驚かす。現代文明の利器の一つである蓄音機に Verdi 作曲 *Aida* をかけてもらった Ramses は音楽の調べに魅了される²⁶⁾。

Julie の留守に Stratford 邸から Lawrence の日記をこっそり持ち帰ってきた Elliott は、Ramses のパピルスに記された内容を Lawrence が翻訳した文章と、Ramses が服用したと主張している不老不死の霊薬に関する Lawrence の注釈にすっかり心を奪われているうちに殆ど若さを取り戻したような思いがした²⁷⁾と述べられており、明晰な頭脳を持ちながらも早すぎる老いのために思い通りに体を動かすことが困難になってきた人間の切実な願いに我々は心を動かされる。

Julie が眠りについた後、Ramses は大英博物館の裏手にある Samir のオフィスを訪ね、博物館に所蔵されている彼の祖先や子孫の遺物を見せて欲しいと頼み、Samir は快さに身震いして感激の涙の中に苦みの混じった幸福を感じながら、Ramses に館内を案内して回った。Ramses はここに展示されているミイラの中で、特にプトレマイオス王朝時代の女性のミイラの棺を見つめていた²⁸⁾、と書かれているので、彼が片時も Cleopatra への愛を忘れ去ることができないのだと分かるであろう。そして作者 Rice がエジプト文化とギリシャ・ローマ文化の不思議な文化的混交の産物と言うべき「ミイラ肖像画」(Mummy Portrait)²⁹⁾についての詳細な知識を持っていたことが明らかである。すなわち Ramses が凝視していたのはエジプト風の棺であるが、蓋の上に描かれている故人の肖像画は、もっと古い時代の様式化されたマスクではなく、写実主義的なギリシャ風の顔の絵であった。もちろんそれは Cleopatra の棺ではな

かった。Samir から、真の宝ともいうべき国王たちの亡骸があるのはエジプトであると聞かされた Ramses は、Julie からエジプトを訪れて古い世界を自分で見る必要があるのではないかと言われたことを思い出し、「突然、過去のために現在が見えなくなった。過去の時代に完璧に別れを告げるまで私はこの時代を受け入れて抱き締めることができない。」³⁰⁾と語る。ここで暗く激しい情熱に満ちた「過去」を象徴するのは Cleopatra であり、光と希望に溢れる「この時代」を象徴するのが Julie であると推察される。賢明な Samir は、当局が貴重な Cleopatra 金貨の盗難を知っており、Ramses 大王のミイラを取り戻そうとしている以上、イギリスを離れてエジプトへ向かうように、彼が望むなら Julie を連れて行くように忠告した。Ramses は Henry が「学問のある賢い男」であった伯父を毒殺して金貨を盗み、同じ手段で従妹も殺そうとしたので自分が彼女を助けたのだが、十分に体力を回復していれば彼をミイラにして Ramses として棺に納められたのにと悔しがる。だが結局、卑劣な悪者 Henry の亡骸はミイラにされることになる。従来の文学作品や映画に登場する「蘇ったミイラ」とは異なり、Ramses は自分の墓を発掘した考古学者とその娘に対して、恨みとは正反対の暖かい同情心を持っていることを決して見逃すべきではない。Julie を心から愛している Ramses は、何物からも、彼自身の欲望からも彼女を守ると誓う。彼は Julie とともに現代社会を我がものとし、彼女とともに未来を生きるために、過去と完全に訣別する目的で、現代のエジプトへ行くことを決意する³¹⁾。

Stratford 邸に戻った Ramses は再び Cleopatra の胸像を見つめ、「起きよ Ramses、エジプトの女王が汝を呼んでいる。汝の深い眠りから目覚め、この苦悩の時期に我が助言者となるのだ。」と呼びかけて彼を目覚めさせた少女の頃の Cleopatra の姿を思い浮かべた³²⁾。蠟人形館にあった彼女の像が安っぽい妖婦として表現されていることに彼は義憤を覚えていた。極めて知的で驚くべき才能の持ち主の持ち主であった彼女が 20 世紀の人々には放蕩のシンボルという誤った印象を与え「絹張りの寝椅子に横たわる虚飾に満ちた娼婦」として現代人たちに記憶されていることに彼は苦悩していた³³⁾。Anne Rice がこの小

説の中で、Cleopatra は死にかけている Mark Antony の命を救うために不死の霊薬を与えてほしいと Ramses に懇願し、彼から拒まれたので毒蛇に胸を噛ませて自殺したという説を展開しているのは非常に興味深い。一方 Ramses は Julie を「目を見張らせるような女性、統治する国が無くても王者の威厳を備えた、華奢な骨格の現代の女王、素晴らしく賢く、驚くほど強い女性」³⁴⁾と評して敬意を払い、自分自身の欲望からも彼女を守らねばならないという誓いを再確認する。

Ramses は不老不死の霊薬の秘密を保持するためには自分が身につけているのが望ましいと思い、エジプトの墓から運ばれてきたアラバスターの壺の中の白い粉を蒸留して、その液体を瓶に詰めた。彼がそれを温室の植物と London の貧民街で車と衝突して死んだ鳩に試してみた結果、植物は奇跡的に成長し、生き返った鳩は空高く飛び去った。彼はヒッタイトの女祭司の洞窟のそばを飛んでいた不死の鳩たちのことを思い出した。そして年老いた女祭司の祭壇に置かれた杯の中の白い液体を飲み干し、灰色の髪が抜け落ちて丈夫な褐色の髪が生え、目の色が黒からサファイア色に変わったときの驚きが彼の胸に蘇った³⁵⁾。彼は銘板に記された楔形文字を読んで、生命の霊薬の製法を記憶したが、その材料はエジプトの野原や川岸で集められるような、どこにでもある物であった。

Julie が Ramses とともにエジプトへ行くと決めたときに、叔父 Randolph は、Samir と召使いの Rita が付き添うと聞かされても猛然と反対したが、留守中の Stratford 海運の経営を任されると知って、安堵を隠せなかった。Ramses の不老不死の霊薬を手に入れたいと切望していた Elliott は Julie の付き添い役としてエジプトに同行すると主張し、Randolph は事態の都合良い進展に満足したが、旅の間の従妹の行動を監視・報告させる目的で息子 Henry を同行させることにした³⁶⁾。

Ramsey (実は Ramses) を観察していた Elliott は、驚くほどの分量の食物を平らげながら新聞や書籍を次々に読んでいる、この極めて美しい男に大いに引きつけられた。Ramses がアスピリンを知らないことに彼が驚いているふり

をする場面は、明らかに Edgar Allan Poe の短編小説 “Some Words with a Mummy” (1845 年) を思い起こさせる。David Huckvale が指摘している通り “Some Words with a Mummy” に登場するミイラ Allamistakeo は Rice が創造した Ramses の原型である³⁷⁾。Poe は 5500 年間の眠りから覚めた Allamistakeo の口を通して 19 世紀中頃のアメリカ社会と文化を批評させており³⁸⁾、*The Mummy* Part 1 の第 11 章でエジプトへ向かう豪華客船のダイニング・ルームで軽妙に展開される Ramses と George V 世時代のイギリスの上流階級の人々との会話は、この作品の中で最も重要な文化史的意義を持っている。Elliott から London 滞在中の感想を尋ねられた Ramsey (Ramses) は、そこが圧倒されるような場所で、恐ろしいほどの富と不可解な貧困が奇妙に混合していると評した。すなわち非常に多くの機械がほんの僅かな人々のために実に多くの物を生産し、大多数の人々のためにはごく少しの物しか生産しないことが理解できないと彼は指摘した。すると、歴史にも経済学にも深い知識のない Alex が Ramsey はマルクス主義者なのかと皮肉った³⁹⁾。次に、他のどのファラオよりも自分自身の記念碑を数多く残した Ramses 大王は極度の自己中心主義者であったと Alex が述べると、Ramses は「歴史上、あれほど多くの勝利を獲得し…あれほど多くの妻を楽しませ、あれほど多くの息子をもうけたエジプトの王がほかにいるのか」と興奮しながら反論した。そして、あれほど多くの像を建てることによって、そのファラオ (Ramses II 世) はまさしく民衆が欲しているものを彼らに与えていたのだと説いた。Alex が神殿や巨像の建設は炎天下での残酷な奴隷労働によるものだという俗説を唱えると、Ramses は、相手の若者が、エジプトの民衆について何の知識もないことを諷め、神殿に誇りを持ち記念碑を自ら求めていた民衆は、Nile 川が氾濫して農作業ができない時期に公共事業に従事したのであり、強制労働ではなかったと説いた。そして彼は、Ramses II 世は民衆にとって誇りであり、神のような存在であったので、民衆が期待するように行動せねばならなかったのだと強調した⁴⁰⁾。*The Mummy* の作者 Anne Rice がピラミッド建設の背景や古代エジプト人の国民性について極めて深い知識を備えている点に注目する必要があるであらう

う。内心この議論を楽しんでいた Elliott が、Ramses を故意に怒らせようとして、古代の王たちは完全な暴君で、馬鹿げた記念碑の建設を行なわない臣民を殴り殺したのではないかと、Ramses II 世は自分の業績を自賛する石碑を建てるような並外れて厚かましい支配者であったのではないかと述べると、Ramses は次のように冷静に返答した。すなわち、当時の民衆は支配者がそのように自己表現することを望んだのであり、支配者と民衆は同一の存在であったので、民衆が偉大になるためには支配者が偉大である必要があったのだと彼は述べ、民衆の願望、要求、福利という点では支配者は民衆の奴隷に等しかったという説を展開した⁴¹⁾。Ramses の述べている内容全てに我々は同調することはできないかも知れないが、賢明な君主がいかにあるべきかを説く Ramses の言葉が非常に深い意義を持っている⁴²⁾ ことを見逃してはならない。会話を通して Ramses の知性と人間性に大いに魅せられた Elliott は遂に、現代に蘇ることができた古代人は現代人の価値観を理解できるのだろうか、古代の帝王に向かってずばりと尋ねる。それに対して Ramses は次のように答える。

「あなたがたを理解するのは、それほど難しくはない。あなたがたは自分自身を表現することを余りにもよく学んでいるので、隠れたものとか神秘的なものが残されていない。現代の新聞や本は全てを告げています。それにもかかわらず、あなたがたは、古代の先祖とそれほど異なっていない。あなたがたは愛情や慰め、正義を求めています。それはエジプトの農民が畑を耕すために出て行ったときに求めていたものと全く同じです。それはロンドンの労働者たちが求めているものです。そして今も昔も、金持ちは自分の所有物を守ることに汲々としており、貪欲が重罪を引き起こすのです。」⁴³⁾

様々な情報が氾濫している現代社会においても、人類の精神は古代人と全く同じであるという永遠の真理を叡智ある Ramses が語っていることにおいて、上の引用文は深い含蓄を持っている。それと同時に、Ramses が、金欲しさに伯父を毒殺した Henry の顔をまじまじと見つめながらこの言葉を語っている

場面は dramatic irony に満ちている。更に Ramses は、主として物質文明において現代人は古代エジプト人よりも優れているが、依然として人間であることは同じで、電気や電話のような素晴らしい魔術を生み出したにもかかわらず、貧民には食べ物もなく、人は自分自身の労働で得られなかった物を求めて人殺しをするので、現代社会においても精神面での諸問題は未解決のままであると主張している。

Oxford 大学出身とはいえ真に知的な青年とは言い難く、エジプトの歴史やマルクス主義など勉強したこともなかった Alex は、自分の婚約者の恋敵を何とか言い負かそうと闘志を燃やして、Shelley の詩 *Ozymandias* を引き合いに出して古代エジプトの帝王の権力の虚しさを力説しようとし、Cleopatra を古代世界のあばずれ、濫費家、妖婦、ヒステリックな女と罵った。終始はらはらしながらディナーの席にいた Julie は、浅薄な Alex が Ramses を激昂させることを恐れたが、Ramses は見下したように、Cleopatra が「輝かしい知性の持ち主で、語学の才能と国を治める天賦の才に恵まれ、あらゆる意味で国王にふさわしい精神の持ち主であり、当時最も偉大な男たちが彼女に求愛したからこそ、Shakespeare が彼女を主題にした戯曲を書いたのだ」⁴⁴⁾と説いた。同席していた Samir も、自国の歴史を真摯に受け止めている自分たちエジプト人にとって、Cleopatra はいかなる基準から見ても畏怖の念を起こさせる女王であることを理解してほしいと Alex を諫めた⁴⁵⁾。この作品が単なるミイラ小説・怪奇小説を超越した極めて優れた大衆芸術である理由の一つは、作者 Rice が imperial Gothic の先入観に捕らわれず、古代エジプト人の精神世界の卓越性を主張している点である。Bram Stoker はミイラ小説 *The Jewel of Seven Stars* (1902 年) の第 16 章で古代の世界と現代 (19 世紀末～20 世紀初頭) の世界を対立させ、古代人の知性の方が現代人よりも優れていたのではないかと暗示している⁴⁶⁾が、imperial Gothic の旗手 Stoker は 1912 年の版では原作の骨子とも言える第 16 章を省略し、霊的洞察力を持った女王 Tera がミイラから復活するのに失敗して消滅したという結末に変更したことからも推察される通り、最終的には古代エジプトの神秘主義思想を不可解でおぞましいも

のと見なしている。これとは対照的に Rice の *The Mummy* においては、蘇った Ramses は、1914 年当時イギリスの保護国という地位にあったエジプトがイギリスの支配から脱するためには Cleopatra のような知略家が必要かも知れない⁴⁷⁾とイギリスの上流階級の人々に対して堂々と語っており、この小説がいかに革新的な思想に富んだものであるかが明らかである。会話の間中、Ramses は Henry の良心をいたぶる発言をし続けており、遂に Lawrence が死の直前に非道な甥を罵倒した言葉をそのまま繰り返したので、耐え切れなくなった Henry は席を立った。Ramses は邪悪な Henry を一刻も早く抹殺しなかったが、愛する Julie の心の平安を乱すのを恐れて、当座は生かしておくことに決め、彼女に二度と危害を加えぬようディナーの後で Henry に警告する。この場面で Henry はミイラから蘇生した Ramses を「滅ぼされるべき怪物」と定義し、人間以下の存在 “the thing” とみなしている⁴⁸⁾。

優雅なディナーの席で爆発寸前の状態の論争が展開されたことで Julie は狼狽して嘆き悲しむが、この船上のディナーでの論争を境として彼女が物語の最初で示していた才気や自由意志や行動力を失って行くのは、読者にとって誠に残念である。彼女は次第に自暴自棄になり、父を毒殺した Henry への復讐や許婚者 Alex をどう扱うべきかという問題が煩わしくなって、Ramses への恋に生きている現在の瞬間だけが貴重に思われた⁴⁹⁾、と述べられている。

このような Julie とは対照的に、ストーリーが展開するとともに読者が引きつけられるのは Elliott である⁵⁰⁾。彼は Ramses と知り合って話をするうちに、遙か昔に経験した最も幸福な時期—Oxford 大学の学生で Lawrence と愛し合っていた 20 歳の頃—を再び取り戻したような高揚した気持ちになった。55 歳になり、体を病に冒されつつある現在の彼は、Ramses が獲得した永遠の生命というものが本当に存在するのなら、何とかして我が物にしたいと切望していた。だが不死者である Ramses は、実は常人には理解できないような苦しみに悩まされており、感覚的な欲望をいかに満たそうとも、完全に精神的に満たされることはなく、常に食べ物や飲み物を求めている。しかし彼は、Julie の愛を得られれば心身ともに満たされるだろうと信じ、彼女が自分の愛を受け入

れるまで忍耐強く待つことにした。かつて Cleopatra と深く愛し合っていたときでさえ、不死の身である Ramses は死すべき人間が耐えられる以上に孤独であったと述べられており、「永遠の孤独」は、Anne Rice の創造したヴァンパイアたちと Ramses に共通する呪われた宿命とみなすことができる。

Alexandria に到着した Ramses は、彼にとって余りにも大きな意味を持つ古代の都が余りにも変貌してしまったことに深刻な衝撃を受けた、とある。Cleopatra の霊廟も、偉大な図書館も、灯台も、Alexander 大王や Cleopatra が建てた全てのものが跡形もなくなり、古代の世界のアカデミーであったこの都が今や海辺の行楽地と化しており、Cleopatra の宮殿のあったまさしくその場所に立っているホテルは裕福な欧米人で一杯になっていた⁵¹⁾。作者 Rice は古代人の側に立って、固有の歴史的・文化的価値を失い、奇妙に西欧化された 20 世紀初頭のエジプトの都市を批判していることが明白である。

Ramses は、まだ少女の Cleopatra が 300 年間の眠りから自分を目覚めさせた Alexandria の地下墓道を Julie とともに訪れた。Ramses の目から見れば「意志が弱く、墮落していて、気概のない男」である Mark Antony を愛したために誇り高いエジプトの女王ではなくなり、Antony とともに破滅への道を突き進んで行った Cleopatra に対して抱いていた激しい恋情とは異なる、優しさと思いやりに満ちた愛情を、彼は現代の聡明な女王 Julie に捧げていた⁵²⁾。

Alexandria を立った一行は上品な小型蒸気船で Nile 川を溯った。Ramses の復讐を恐れた Henry が Cairo へ逃亡したので、彼らは和気あいあいとした雰囲気になり、親しみ深く接し合うようになった。Luxor の王家の谷で呼び売り商人がミイラの萎びた手を売りつけようとしたとき、Elliott は Cairo のミイラ製作所で作られた物だろうと笑ったが、Ramses は、それが自分と同じ位古い時代に生きていた人間の手だと見抜いて買い取った。数日後、彼が古代の霊薬の効力を試そうとして黒ずんだ手に注ぐと、その手は生命を取り戻し、まるでそれ自身で意志を持っているかのように動き始める。この場面は Bram Stoker の *The Jewel of Seven Stars* とそれを映画化した Hammer の *Blood From the Mummy's Tomb* (1971 年) に登場する女王 Tera の切断された手を

思い起こさせる⁵³⁾。最初は恐ろしさに慄然としていたが、やがて自分の愚かしさに嘆きながら、Ramses はその手をナイフで切り刻み、まだ動いている血だらけの肉片をタオルで包んで Nile 川に投げ込む。かつてエジプトを治めていた頃、不死の霊薬で育てた穀物を食料としていた不死の家畜の肉を食べた臣民全てが苦しみながら死んで行ったときの忌まわしい思い出が彼の胸に蘇る。ヒッタイトの女司祭から不老不死の霊薬には「世界の終焉をもたらすような恐ろしい秘密」が隠されていると警告されていた⁵⁴⁾のにそれを顧みなかった Ramses は、身も凍るような経験をしたのだった。

Abu Simbel の Ramses II 世の最大の神殿を Julie とともに夜に二人だけで訪れた Ramses は、初めて彼女に自分の生涯の苦悩について語る。王位を後継者 Merneptah に譲った後で世界中を放浪した彼は、不死の自分の存在意義に疑問を抱いたが決して死ぬことができず、呪われた人生に疲れ果て、死に似た眠りを得るために墓の暗闇の中に入っていくことにしたが、王家に仕える神官たちには自分が横たわっている場所と太陽の光が自分を蘇らせることを告げておき、神官たちは代々のエジプトの支配者にその秘密を伝えた。しかし Ramses は自分が目覚めるのはエジプトの国益のためであり、単なる好奇心や邪悪な意図で無謀にも彼を起こす人間には復讐が行なわれるだろうと警告しておいた。彼は、エジプトの女王として彼の忠告を必要としていた Cleopatra のために目覚め、有益な助言を与えて彼女を導いた。そして Antony に霊薬を与えてほしいという彼女の頼みを彼が拒んだ理由は、自らの人生と Cleopatra の人生を破滅させた Antony のような浅薄な男が強大な力を持ち、彼女とともに世界の支配者となって不死の軍隊を持つことを恐れたからであった⁵⁵⁾。Cleopatra の死を悼んで再び深い眠りにつこうとしていた Ramses が自分の不思議な人生の記録を巻き物に書き残したのは、将来の新しい世界に目覚めて新しい賢明な人々に会うことを夢見ており、自分がもはや孤独な放浪者ではなくなり、呪われし者 Ramses が再び不滅の Ramses となることを望んでいたからであった⁵⁶⁾。Bram Stoker の *The Jewel of Seven Stars* においても、先見の明があり、崇高な精神を持った女王 Tera が新しい理想的な世界に蘇ることを夢見て自ら進ん

で墓の中で眠りについた⁵⁷⁾という記述があり、Tera と Ramses には共通点が認められるが、Stoker は Tera が 20 世紀のイギリスで新しい人生を始めることを許さなかった。これに対して Rice の *The Mummy* では Ramses の心の深い苦悩を知り、自分こそ Ramses が求めている人間に他ならないと確信した Julie は彼の愛を受け入れ、二人は結ばれる。

Ramses にとって Cairo の British sector は London の一部のように思われ、一行が滞在していた Shepherd's Hotel には、これまでのエジプト観光の旅で出会ったのと同様の裕福な欧米人が沢山見受けられた。そのホテルで Alex は New York から来た裕福な Barrington 家の美しい娘 Charlotte と親しくなり、Elliott は Julie を諦めなければならなくなった息子が新たな女相続人と結婚する可能性があることを嬉しく思った。そして Ramses は Julie, Elliott, Alex, Samir, Charlotte とともに Cairo 博物館を訪れた⁵⁸⁾。そこが古代エジプトの宝の最大のコレクションであることは間違いなかったが、全て墓から略奪された品々であり、薄暗い明かりに照らされ、汚れたガラスのケースに入れられながらも、歳月と崩壊から逃れて、世界中の人々が見るように陳列されていると Ramses には感じられた。彼は、国王たちのミイラがデパートのガラスのケースのようなガラス箱の中に収められていることを知って笑い出しそうになったが、歯をむき出した黒い死体、オーヴンから取り出した黒焦げの物体のようにおぞましい遺骸は彼に鈍い衝撃を与えた⁵⁹⁾。だが彼は自分自身の名がつけられた瘦せた恐ろしいミイラを見下ろしたときには微笑みそうになった。見るべき物は全て見て、エジプト旅行の最後の試煉は済んだと Ramses が感じていると、ガイドが、名前の分からない女のミイラを入れたガラスケースを示した。デルタの泥の作用によって自然にミイラ化したとされるプトレマイオス朝時代の女性の顔を見たとき、Ramses にはそれが Cleopatra だとすぐに分かり、恐怖と興奮で我を忘れて、陳列ケースを打ち壊しそうとしたので守衛たちに連れ出された⁶⁰⁾。ホテルに戻った Julie は、Ramses の心に致命的な打撃を与えたミイラの正体が Cleopatra であろうと直感したが、そんなことは現実にはあり得ないと感じていた。そのような彼女に向かって Ramses は苦しげに囁く。

「あり得ないだって！ 君たちは何千人ものエジプトの死者を掘り出した。君たちはピラミッド，砂漠の墳墓，地下墓地に侵入して略奪を行なった。何があり得ないというのだ！… ミイラは盗まれ，取引きされ，売られた。この国で今までに埋葬された男や女や子供で，亡骸が展示されたり，切断されないとしても，汚されなかった者が存在するのか！」⁶¹⁾

Rice は，これまでの文学作品や映画を含めた大衆芸術では決して正面から批判されることはなかった問題すなわち古代エジプト人たちの亡骸に対して欧米人が行ない続けてきた非道徳的で残酷極まりない悪行を，Rames の口を通して怒りをこめて糾弾しており，*The Mummy* の現代性を十分に窺わせている。Julie は Ramses を慰めるために，博物館で衆目に晒されている女性の亡骸を適切に埋葬するよう取り計らえないかと考えたが，数え切れぬほどの王族のミイラが展示されている以上，自分の要求は愚かなものとして拒絶されると諦めたけれども，彼に壊滅的打撃を与えたのは，そのミイラに対する神聖冒瀆行為ではなく，そのミイラを見たという事実であると彼女は気づいていた⁶²⁾，とある。しかし Julie には，Ramses がどれほど深く Cleopatra を愛していたか，彼が自分とともに永遠に生きてほしいと願っていたのに自殺してしまった Cleopatra の亡骸と遭遇した結果どのような行動を取るかは理解できなかった。

一方，Stratford 邸のミイラを確認するために訪れた大英博物館の館員は，棺の中にあるのが贋のミイラー—実は Samir が購入して入れておいた—だと知ると，Julie が世紀の発見物を盗んだと怒り，コレクションの全ての品々を直ちに博物館へ戻すべきだと主張した。

Elliott は真夜中過ぎに足の痛みをこらえながら Ramses の跡をつけて Cairo 博物館に入り，石化したぼろ布をまとめて黒い石炭のように光っている婦人の遺体を収めたケースのそばに立っている Ramses を観察していた⁶³⁾。この場面は Doyle の “Ring of Thoth” で不死の古代エジプト人 Sosra が 19 世紀まで生き続けて Louvre 美術館でかつての恋人のミイラに語りかけている有様をイギ

リス人考古学者 John Vansittart Smith が固唾を飲んで見守っていた箇所⁶⁴⁾を思い起こさせる。しかし Sosra がようやく死ぬことができる毒薬を見つけ、現世に別れを告げて恋人の後を追うのとは正反対に Rice の *The Mummy* では、死後 1944 年を経過した Cleopatra の亡骸を目の当たりにした Ramses は「死を生よりも上に置くことは間違っている」と信じていたので、ミイラの口開けの儀式的祈禱を行ない「汝の心臓は再び鼓動し、汝は生き返る！ 汝は再び若く強くなり、その若さと強さは永久に続くであろう。」⁶⁵⁾と唱え、そのミイラに不老不死の霊薬をふりかける。彼は後になって、彼女の遺体が非常に痛んでいて肉体の相当の部分が失われていたことに自分は気づかなかったと述べているが、激しい愛の炎が今も心に燃え続けている Ramses の目には恐ろしい現実も見えなかったのであろう。この狂気の実験が効を奏するはずはない思いながらも恐怖と魅惑の虜となって Elliott が見つめていると、ガラスケースが粉々に壊れて、ミイラが立ち上がり、身の毛のよだつようなうめき声を発した。黒ずんだ皮膚は明るい色に変色しつつあり、肩の上に濃い煙のようにかかっていた髪も滑らかな黒髪となって伸びてきたが、体のあちこちで白い骨が露出した状態であった⁶⁶⁾。Ramses は恐ろしさの余り、古代エジプトの神々の名を唱えて助けを求め、Elliott はキリスト教の神に身を守ってくれるよう祈願した。蘇ったミイラは、太陽光線を求めて体を動かし、日光を浴びると次第に人間らしくなったが、骨が露出した傷口から血が滲み出して、ぞっとするような有様であった。彼女はしゃがれ声で“Ramses!”と叫びながら、骸骨のような手を突き出して Ramses の方へ進んだ⁶⁷⁾。この部分の描写が凄絶さに溢れていることは言うまでもないが、我々は、蘇ったミイラ女の恐ろしい姿を克明に描いた大衆芸術作品が殆ど見当たらないことに気づくであろう。まして、*The Mummy* に登場する女性のミイラは絶世の美女 Cleopatra であるので、読者は一段と大きな衝撃を受けることとなる。陳列ケースが破壊されたのを知って駆けつけて来た警備員たちが Ramses に発砲し、傷ついた彼を連行した。一方、警備員たちの目を逃れたミイラ女は行く手に現われて悲鳴を上げた掃除婦の首の骨を折った。Elliott はその死骸と、鏡に映った己の醜い姿にすすり泣いてい

る哀れな女に激しい恐怖を感じたが、同時に強い魅力を感じた。そこで自分を攻撃しようとして近づいて来る女に、ギリシャ語とラテン語で、自分は友だちであり、彼女に避難場所を提供する、と話しかけた。彼は黒い外套で彼女の体を頭からすっぽり覆って Cairo の旧市街にある Henry の情婦 Malenka の家へ連れて行った。Elliott は Henry にこの謎の女をかくまってくれるよう頼もうとしたが、むき出しになった足の骨や、背中に開いた穴を通して見える肋骨に恐怖と嫌悪を覚えた Henry は女に発砲した。だが彼は、弾丸を体に浴びながらも襲いかかってきた女に首の骨を折られて死んだ⁶⁸⁾。この場面は伝統的なミイラ映画で犠牲者が惨殺される光景を Rice が彼女の作品の中で再現したと解釈できる。自分の家で Henry が殺されたことで警察が介入すれば、家を没収される恐れがあると危惧した Malenka は、知り合いの男たちに Henry の死体を絨毯に巻き込んで運び出させた⁶⁹⁾と述べられている。Rice は、Cleopatra の美しい体が絨毯から現われたので Caesar が驚嘆したという伝承からヒントを得て、この部分を創作したように感じられる。Malenka の知人のエジプト人たちは Henry の死体を (Samir の従兄) Zaki のミイラ製作所へ運んだ。さきに述べたように 19 世紀から 20 世紀にかけてこの国に押し寄せた観光客、特に富裕なイギリス人たちはエジプト土産として購入したミイラを持ち帰って、それを客に披露して楽しんだという事実があるが、イギリス人 Henry の亡骸がミイラにされて贗の遺物となり、偉大なファラオとして観光客に売られることになる⁷⁰⁾と Malenka から聞いた Elliott は激しい衝撃を受けた。しかし伯父を殺した非道な Henry を元々このような方法で罰することを望んだ Ramses の期待通りになったとも言える。

蘇った女は Henry の銃弾で受けた傷に苦しみながらも Ramses と同様、異常な食欲で貪り食い、驚くべき速度で英語を身につけ、自分が Cleopatra 女王であると Elliott に告げて、彼を感嘆させた。Caesar, Antony, そして呪われし者 Ramses を虜にしてきた官能的な美女 Cleopatra は Elliot の欲望を燃え上がらせることとなる。彼は Ramses が博物館に残して来た僅かな分量の霊薬を彼女に与えたが、身体の損傷を完全に治すことは不可能であった。肉体も精神

も不完全な状態にある Cleopatra は、自分を強い嫌悪と恐怖の対象とみなしてヒステリックにわめき立てる Malenka への怒りを募らせて、首の骨を折って殺してしまう⁷¹⁾。Elliott は彼女を完治させるために、Ramses から霊薬をもっと手に入れる必要を痛感して、彼を探しに出かけた。残された Cleopatra は自分がどこにいるのか、何故この場所にいるのか分からず、Elliott が「現代」と呼んでいた時代の様々な事物に驚嘆するばかりだったが、不思議な街を探索するために *Harper's Weekly* 誌に描かれている婦人たちのファッションをまねた服装をして、骨のむき出した手を手袋で隠して、Malenka の家を後にした⁷²⁾。

エジプト学者として堅気の生活を送っている Samir は、嫌々ながらではあったが、観光客を対象としたミイラ製作を行なっている従兄の Zaki を訪ね、博物館での殺人とミイラ盗難の容疑をかけられている Ramses が当分身を隠すための小さな家を探してもらった。このミイラ製作所に不快感を持続けていた Samir に対して、かつて Zaki が「古代の支配者たち（の亡骸）を少しずつ売る盗人たちと較べれば、我々のほうがましなのだ。我々が売っている物は神聖ではなくて贗物なのだから。」⁷³⁾と語ったと述べられており、彼の辛辣な皮肉の中に真実が含まれていることは否定できないだろう。

20 世紀の Cairo の街で汽車や自動車に Cleopatra が圧倒されて気を失いかけていると、若い英国紳士が彼女を助け起こして喫茶店へ連れて行ってくれた。Cleopatra とその若者は、Cairo に滞在している裕福な観光客全てが翌日の夜に行くのを楽しみにしているオペラ *Aida* と Shephard's Hotel で開催される舞踏会について話し合った。だが彼女は彼が自分の欲望を十分に満足させる能力に欠けていると知ると、何の考えもなしに路地で首の骨を折って殺して金を奪い“Celeste Aida”の歌を口ずさみながら立ち去った⁷⁴⁾。次に彼女は、Missouri 州 Hannibal 出身の Ford 車のディーラーの若者に Giza のピラミッドまで車で連れて行ってもらった後で彼を誘惑しようとした。だが、まだ癒えていない彼女の足の傷口から見えている血だらけの骨に気づいた彼が恐怖と嫌悪の感情をあらわにしたので、心を傷つけられて激怒した彼女は、再び相手の生命を奪った後で彼の動作をまねて車を運転して⁷⁵⁾、Cairo の旧市街へ戻った。永

い眠りから覚めた古代の美女が現代の世界で次々に殺人を重ねる場面は Whitley Strieber のヴァンパイア小説 *Lilith's Dream* (2002 年) と共通している⁷⁶⁾ ことに我々は気づく。

Part 2 の第 4 章で, Ramses は Julie と Samir に不老不死の霊薬がいかに危険なものであるかを詳しく説明している。ヴァンパイア小説や魔女小説の中で「永遠の生命の代償」の恐怖について追求し続けている Anne Rice 独特の見解が、この部分で展開される。Ramses は現代の生物学の本を読んで理解を深めた結果、ひとたびその霊薬を吸い込むと、植物にせよ、動物にせよ、人間にせよ、その細胞は限り無く自己再生を行なうことが解った⁷⁷⁾と述べている。本稿で既にふれたように、彼はエジプトのファラオであったときに、国民に食料を豊富に与える用途に霊薬を利用できるのではないかと夢見て、収穫されてもすぐ元通りに成長する小麦や永遠に実を結ぶ果樹をつくり出すために、作物や果樹に薬を摂取させたことがあった。ところがその結果、不死の食物を食べた人々は、体内で食物がもとの形のままに止まってしまうため、悶え苦しみながら死んでしまった。そして彼が不死の植物を根絶するために畑を焼き払い、不死の家畜を殺そうとしても、太陽に照らされるやいなや、焼け焦げた小麦が生き返り、焼き殺された首のない家畜の死体が起き上がろうとする地獄絵巻が繰り広げられた。結局、不死の作物や死滅できなかった動物の屍は全て重りをつけて深い海底に沈められたが、今もそれらの姿は変わっていないはずだと彼は話す。この霊薬の秘密の管理が悪用されれば、地球上の幾つかの地域全体、幾つかの民族全体が不死になる可能性があり、永遠に空腹である不死者たちが普通の人間が食べるはずであった食物を消費し尽して、地球上の「生と死のリズム」そのものが危機に晒されることとなる⁷⁸⁾。たとえ Ramses が自分の持っている霊薬を廃棄しようとしても、その成分を無に帰すことは絶対に不可能であり、更に彼自身が霊薬の製法を記憶している以上、いつでもそれを製造できるのであった。このような霊薬の危険性を知っていたので Ramses は 1000 年間それを誰にも分け与えるのを拒んできたが、「死すべき人間」と同じ弱さから Cleopatra への恋に陥った。しかし Ramses は、放埒な Mark Antony の悪影

響を受けて完全に墮落してしまった彼女に Antony の命を救う霊薬を渡せば、Antony と Cleopatra は不死の支配者となって不死の軍隊をつくり出し、Antony は霊薬の製法を知るために自分を地の果てまで追跡するだろうと案じて Antony を助けなかった結果、Cleopatra は自殺してしまったが、彼女の死から 2000 年を経て、その亡骸と再会したとき、自分が熱愛を捧げてきた彼女を蘇らせてしまったのだ⁷⁹⁾と打ち明けた。

Ramses の告白に対する Julie の見解には、人間の生と死に関わる本源的な意味が提示されている。すなわち Julie は人間の靈魂（知性）は肉体が死んだときに肉体を離れて、より高い領域に昇って行くか、存在を止めてしまうものである、彼が霊薬で蘇らせたのは彼が愛していた本当の彼女ではないと説き、生き返った女が自分の正体や自分の愛した人について知っていたとしても、それは細胞の中に記憶が組み込まれているだけで、死者の怪物的な双子のようなものだと言った。そして Julie は、死亡してから 2 か月も経過しておらず、検死解剖も行なわれずにエジプトの地下霊廟に遺体が納められている自分の父とうりふたつの存在を死から蘇らせようとは決して思わないと言った。更にエジプト人の Samir も、腐敗した肉体に靈魂が宿ると主張するような宗教はあり得ないと述べる。結論として Julie は、Ramses は真の不死者であるが、彼が復活させたものは Cleopatra にうりふたつの怪物なので滅ぼさねばならないと言っている⁸⁰⁾。Julie の言葉に幾分かの実実は含まれているが、裕福な上流階級の家庭で育った彼女が空理空論を弄んでいるという印象は拭い切れない。物語の後の部分で、Julie は自説を覆し、蘇った Cleopatra の人格を認め、彼女を再び暗黒の闇に葬り去ることは残酷であるので抹殺しないよう Ramses に請願しており、物語の最初で読者を引きつけた強烈な個性や自我を喪失している。

早すぎる老いに苦しんでいる Elliott は、若さと健康を取り戻すための霊薬を与えてくれれば Cleopatra が隠れている場所を教えるという条件を Ramses に示した後で Malenka の家へ戻るが、Ramses の居所を知らせよう迫って逆上した Cleopatra に襲われる。だが、尾行してきた Ramses が Elliott の命を

救い、Cleopatra に霊薬を飲ませて、無傷の体に戻す。Ramses と Cleopatra は激しく情を交わすが、彼女は依然として完全には過去の記憶が取り戻せず、Antony を霊薬で復活させるのを Ramses が拒絶した生々しい記憶が蘇り、自分が蛇の毒で死んで行く中で Ramses に助けを求めたのに背を向けられた⁸¹⁾と主張し、Ramses がこれを否定しても彼女は頑として受け入れなかった。生前の美しい姿を完全に取り戻した Cleopatra は Ramses を蹴り倒し、自分が殺したアメリカ人の若者の自動車を運転して、イギリス人地区へ向かう⁸²⁾。The Mummy の Part 1 で Ramses がミイラという仮死状態から蘇生した後に Julie の愛に支えられ、彼女の死んだ父親の服や身の回りの品を利用しながら何不自由ない生活を Stratford 邸で送っていたのと比較して、Part 2 で Ramses の不老不死の薬によって命を取り戻した Cleopatra は欲望の赴くままに、残虐な行為を重ねているが、これは彼女の精神的な傷が完全には癒えていないことに起因すると判断できる。

Ramses は、この新しく輝かしい時代において古代の Cleopatra の靈魂が偉大な変貌を遂げると期待していた自分の予想が甘かったと気づき、自分の愚行を後悔した。彼は遙か昔に自分を虜にした情熱のために、もっと優れた強い愛 (a finer, stronger love) を犠牲にしたことを嘆き⁸³⁾、罪のない人々を平然と殺す怪物を闇に葬るべきだと決心した。

オペラ舞踏会に必要な最高級品を取り揃えたドレスショップで豪華な衣装や毛皮や宝石を見つけて喜んだ Cleopatra は女主人を殺し、品物も金も奪って Shepherd's Hotel に向かった⁸⁴⁾。彼女はそこで偶然 Elliott の息子 Alex を見かけ、この優雅な美青年を誘惑した。彼女は、純真で心優しい本物の貴族の若者と接するうちに、彼を月の女神 Selene に愛された美青年 Endymion のように美しく感じるようになった。彼女は、自分がこれまでいともたやすく生命を奪った人間たちと同じように、彼もまた、傷つきやすく、はかない死すべき生き物であると知っていたが、彼を死なせたり、苦しめたくないと感じ、彼を守りたいという強い思いが湧き起こった⁸⁵⁾、と述べられている。The Mummy のストーリーの最初の部分では new woman の代表としてどのような生き方を

するか読者の期待を集めていた Julie が Ramses の愛を受け入れてからは受動的な生き方に満足する常識的で平凡な女性に変貌して行くのに対し、心身ともに傷だらけの錯乱状態で現代世界に復活したために人々の恐怖と嫌悪と軽蔑の視線に晒され、怒りのはけ口を暴力的な破壊行為に求めている Cleopatra は、無垢で思いやりのある若者 Alex の真心にふれることで心の平安を得て、激烈で悲劇的な人生の中では自分が持てなかった人間的な優しさを身につけ、「死ぬことができなくなった」自分とは異なる死すべき人間たちのはかなさゆえの美しさの価値を称賛する境地にまで達する。作者 Rice が *The Mummy* の Part 1 は Ramses の復活、Part 2 は Cleopatra の復活に焦点を当ててストーリーを展開させたことは確実である。

賢明な Elliott は、Stratford 邸と Cairo 博物館の両方からミイラを盗み出し、数々の殺人事件を引き起こした犯人は賭博で人生を破壊された Henry であったという筋書きを思いつき、Julie と Alex を凶悪な事件から抜け出させて無事に帰国させるためには、全ての罪を（今ではミイラにされてしまった）Henry に着せてしまうのが最良の策と判断した。Ramses は Elliott を「優れた国王、或いは国王のしたたかな助言者になれたはずの」⁸⁶⁾賢者として高く評価し、彼らの間には完全な友情が生まれていた。そして Julie は、Elliott に対して、過去に何度も感じたように、もし彼の妻や息子や Ramses がいなかったなら彼と結婚していたかも知れないという思いにとらわれた、と述べられている。*The Mummy* の中で Rice が最も彼女自身を投影させた人物は恐らく Elliott であろう。彼は古代エジプトが自分の人生においてどのような意義を持っていたかについて Julie に次のように述べている。

「若かった頃...君のお父さんと私は何か月間も、エジプトで過ごした。我々は書物を熟読し、古代の墓を調査し、文献を翻訳し、毎日砂漠を歩き回った。古代エジプト、それは我々の詩的靈感となり、我々の宗教となった。我々は、退屈と、最終的には絶望に通じるように見える全ての事柄から我々を選び去ってくれる何らかの秘密の知識が古代エジプトに存在すること

を夢見た。ピラミッドには、まだ発見されていない秘密が本当に含まれていたのか？ エジプト人たちは神々自身が耳を傾けるような魔法の言語を知っていたのか？...明らかにされていないどのような哲学、どのような錬金術があったのか？...或いは古代エジプトの文化は、高度な学問、真の神秘の見せかけだけを生み出したのか？...分かっているのは、探求そのものが情熱となったということだった。⁸⁷⁾

The Mummy は、Ramses II 世や Cleopatra のミイラが現代に復活した有様を描いた現実にはあり得ないような物語であるが、何故我々がそのような幻想に魅了されるのか、その幻想が現代に生きる人間にどのような意義があるのかについて明確に述べているのが、上に引用した Elliott の言葉であろう。虚飾に満ちた貴族の社交界で日々を送るうちに実際の年齢以上に老いて病いに冒されるようになった Elliott が古代の叡智に満ちた帝王と親しく交わるうちに青春の情熱を取り戻して行く描写を読めば、古代エジプトの持つ魔法の力とは、現代人の心に超常的な事柄や永遠の生命に対する情熱を生み出し、人生への希望を蘇らせることであったと理解できる。Victoria 女王時代の imperial Gothic の作家とは異なり、Rice は古代エジプトの文化・文明に対して負の先入観を持ってはおらず、無味乾燥な現代社会と比較して、古代エジプトを一種の理想郷とみなしていたことは間違いない⁸⁸⁾。

Alex は Cleopatra の風変わりな態度が Ramsey (Ramses) と似通っていることに気づきながら、ドレスショップでの殺人事件を報じている新聞記事を読み、重要参考人とされている Ramsey と Julie の写真を彼女に示した。許婚者の愛を失ったことで絶望していた Alex は Cleopatra (もちろん彼は彼女が本物のエジプトの女王とは信じてはいなかったが、彼女に「殿下」[Your Highness] と呼びかけていた) の愛を得た今となっては Ramsey と Julie の間柄が全く気にならなかった。彼は Cleopatra に、彼女が蘇った当初は苦痛や死をもたらす恐ろしい器具だと感じていた鉄道や自動車やエレベータなどが現代の人々に奉仕するための物なのだと教えた。ちょうど Part 1 で Julie が復活した

ばかりの Ramses に現代社会の様々な事物について説明したのと同様に、Part 2 では初めて恋の歓びを知った Alex が Cleopatra に楽しげに語り続けた。Alex は、かつて自分が Julie に対して抱いていたのは愛と呼ぶには余りに淡く、身勝手に、全く気楽な感情だったと彼女に話した。そして彼は、Cleopatra の彼に対する態度が真剣で誠実なものに変わったことを指摘しており⁸⁹⁾、彼女は自分の愛の強さに我ながら驚くのである。彼女が自分を幽霊或いは別世界からの来訪者のように思うかと Alex に尋ねると、彼は、それより遙かに現実的で、生き生きとした血の通った存在である⁹⁰⁾と指摘する。蘇生して以来、欲望の赴くままに行動する怪物的な女として描かれてきた Cleopatra が、魔性の女であるにせよ、極めて情緒豊かな人間に変わって行く過程が描かれていることに我々は注目すべきである。霊薬と Alex の優しい愛情によって過去の記憶の断片を綴り合わせることができた彼女は、瀕死の Antony に霊薬を与えてほしいという自分の懇願を退けた Ramses への激しい憎悪を燃え立たせたが、聡明な女王であった自分の人生が Antony を恋したために破滅してしまったことを Ramses が深く悲しんでいたのを思い出した。Cleopatra と知り合って初めて情熱的な愛というものを知った Alex は、彼女が古代の女王その人とは信じられなかったが「我が女王」⁹¹⁾と呼んだ、と述べられており、これは Part 1 において復活した Ramses が、自分を光と希望に溢れる新世界に導いてくれた Julie に向かって言ったのと同じ言葉である。Cleopatra が Antony に対して抱いていたのは正真正銘の愛であったけれども、それは、彼なしには生きられないが、彼と一緒に生きて行くこともできない絶望的な愛であり、自己の破滅を熟知しながらも暗黒と破壊の中を猛進して行くしか道はなかった。彼女は暗黒の波の中に永遠に引きずり込まれるような Antony への愛の重荷から解放されて別の生き方をする「再度の機会」(*another chance*)に恵まれることを生前に望んでいたので、Alex との間に誕生した新鮮な優しい愛が与えてくれる幸福—それがいづれ壊されるとしても—に希望を見出だしたいと願っていた⁹²⁾。

Julie にとっても Ramses にとっても、何事もなかったかのように着飾ってオペラ劇場へ行くことは虚飾に満ちた偽善的な行動に思われたが、自分たちが

殺人・盗難事件とは全く無関係であると平静を装うためにはそうする必要があると Elliott に諭され、特に純真無垢な Alex の人生を汚さないためには必須の条件であると感じられた。一方 Alex とともにオペラハウスへ行った Cleopatra は、Elliott の一行とは離れた席から、不死の活力に輝く Ramses と彼に寄り添っている極めて美しい娘—Alex と同じようにはかなげで、霊薬を与えられていないために死すべき人間のままである Julie を眺めていた。Ramses と Julie が接吻を交わしているのをオペラグラス越しに見たとき、Cleopatra は激しい苦痛に襲われ、Julie への憎悪で心を焼き尽される思いがした⁹³⁾、と述べられているが、彼女はそれが嫉妬ゆえのものだとは気づかなかった。Ramses から、霊薬を飲んで永久に自分と一緒にいてほしいと頼まれた Julie は、それを拒み、彼に会わなければ良かった、Henry の計画通りになって（自分が死んで）いれば良かった⁹⁴⁾と Ramses に言った後で、気分を静めるために化粧室へ駆け込んだ。Julie を追ってそこへ入った Cleopatra は、大きな青い目に残忍さを滲ませて「若くて繊細で花のような」彼女の生命を摘み取るのはたやすいことだと語った。だが彼女は、自分の愛した者が死なされたという理由で、何の関わりもない Julie の命を奪うのは公平でないように思い、何故自分が Julie を殺してはならないのかと激情に駆られて叫びながら、Julie の喉を締め始めたが、二人の婦人が化粧室に入ってきたときに彼女の体を放して立ち去った⁹⁵⁾。ここで我々が忘れてはならないのは、Julie が後で指摘しているように、Cleopatra は彼女を殺すことができたのだが最終的には、それを断念したという点である。Cleopatra は、Ramses が Antony を死から救ってくれなかった復讐として、Ramses が愛している Julie の命を奪ってやるのだと言っているが、実は、自分が長年愛し続けてきた Ramses を魅了した Julie に対して激しい嫉妬と憎悪の炎を燃え上がらせたのだと解釈できる。彼女は Alex のように純情で心優しい若者を愛することを通して、死すべき人間の生命の尊さを強く認識するようになり、自分が現代の世界で再び生きる機会に恵まれた以上、無用の殺人を思いとどまったのであろう。Ramses に復讐することで自分の激しい怒りが癒されるのか、若い Alex を連れて、自分の良き師であり創造者であ

る Ramses から出来る限り遠くに去るのが適切なのかと Cleopatra は苦悩したと述べられている。そして「これほど激しく愛し、憎むことが、人生そのものの精髓であり、自分は、人生を、その歓喜と苦痛もろともに再び得た」⁹⁶⁾と彼女は悟った。我々は *The Mummy* の Cleopatra が激情的で危険な女ではあるが、極めて理知的な側面も持っていることを忘れるべきではない。*The Mummy* を論評した研究者の中で、Cleopatra を生きた人間として捉え、その極めて複雑な人間性について真摯に探求した学者が皆無であるのは誠に遺憾である⁹⁷⁾。Anne Rice が続編を書くことを念頭に置いていた *The Mummy* のストーリーが終わりに近づくにつれて、Cleopatra は Ramses 以上に生彩を放つようになる。彼女は Ramses の追跡を逃れて、自由に新しい人生を歩むことを切望していた。彼女は、蘇生した当初のように、自由を得るために「他者を殺すことが解決策とはならない」と悟り、「自分がこれまで深く考えることなしに奪った人々全ての命を思うと、激しい嫌悪感が心に湧き起こった。」⁹⁸⁾

歌劇 *Aida* の公演の後の Shephard's Hotel の舞踏会で Elliott が息子の姿を見つけて声をかけたとき、Cleopatra は、遂に若い恋人と別れねばならない時が近づいたと直感して「忘れないでね。あなたを愛しているのよ。」と Alex に告げる。このように、大勢の人々の人生が美しく輝いているオペラハウスや華麗な舞踏会場を舞台として、緊迫した空気の中でストーリーが展開して行くのは非常に効果的であり、まさに映画的な手法であろう。Ramses は Cleopatra を Alex から引き離して、無理やりに彼女をダンスに引き込みながら話をする。彼女は、自分がもはや気の狂った怪物などではないと主張する。「私はあなたの奴隷でも持ち物でもない。あなたが蘇らせた人間は自由に生きられる。」⁹⁹⁾と彼女が言うのを聞いて Ramses は彼女が紛れもない Cleopatra—「直情的であるだけでなく賢明で、向こう見ずな恋をしても、いかに征服し、支配するかを常に知っていた」女王、「前と少しも変わらない魅力と説得力、猛々しく断固とした意志」¹⁰⁰⁾の持ち主であると確認した。彼は、彼女が心の底では常に自分を愛し続けていたのではないかと思っていたので、死ぬ間際に本当に彼女は自分を呼ぼうとしたのかと問いただした。それに対して彼女は、自分が

彼を愛していたと認めるのは誇りが許さないので、死の恐怖ゆえに彼を呼んだだけで、Antony を死なせた Ramses を許しはしないし、彼を激しく憎んでいると答え、激情に駆られて「呪われし者 Ramses、私はあなたの墓に日光を射し込ませた日を呪う。」と涙ながらに叫ぶ。彼女は「Antony が私の足元に死んで横たわったのと同じように、あなたの愛する死すべき Julie Stratford があなたの足元に死んで横たわるときに、あなたは賢さや愛の持つ意味、常に征服し、支配する女の力を知るだろう。」¹⁰¹⁾と告げ、死すべき人間 Julie の首は、川辺の葦のようにたやすく折れるだろうと故意に Ramses を刺激する。ここで我々は Rice が「不滅の *She* を創造した H. Rider Haggard」と自分の作品を結びつけていたことを思い起こす必要がある。*The Mummy* の Cleopatra の性格は Haggard の *She* の主人公で、誰もが従わねばならぬ絶対的な支配者とされている女王 Ayesha と非常によく似ており、聡明で情愛こまやかな女性でありながら、冷酷で残忍な面を持っている点で共通している。しかしながら Ayesha が自分の愛する Leo と相思相愛の中である Ustane をほんの一撃で殺してしまった¹⁰²⁾のに対し、Cleopatra は Julie を殺すことができたにも拘らず、生命の尊厳を知る境地に達していたため、最終的には思いとどまったのである。彼女が敢えて Ramses を刺激するような言葉を述べたのは、烈しい愛と憎悪に駆られたからであったが、既にこのときの彼女は、過去と訣別したいという思いの方が強かった。そして、Julie を殺すようなことをさせる前に、彼女を再び墓の暗闇の中に戻すと Ramses は脅したが、実は、彼自身が後で Samir に告白した通り、かつて常に言い争っていたように、互いに傷つけ合おうと張り合っていた¹⁰³⁾だけで、彼女を抹殺する気など毛頭なかった。このように古代のミイラの状態から蘇った二人の人間が1914年の世界で、新しい人生を生きようと苦闘する姿を描いた *The Mummy* がいかに斬新な文学であるかを我々は認識する必要がある。

Ramses の言葉に恐怖を感じた Cleopatra は、彼を振り切ってホテルの前に止まっている車に Alex とともに飛び乗り、Ramses たちの追跡から逃れるために車を暴走させているうちに砂漠で道に迷ってしまう。南方へ向かう機関車

と衝突する寸前に、彼女は車を止めることができたが、引き続き迫って来た北方へ向かう汽車が車に激突し、彼女の体は空中高く放り上げられ、その下を、擦れ違った列車が通り過ぎた。この事故の後で、北行きの機関車は停止しようとしたが、南行きの列車はそのまま走り去った。衝突した車は爆発によって大破し、Ramses がいくら探しても、どこにも Cleopatra は見当たらなかった。幸いにも同乗していた Alex は一命を取り止めた。Ramses の忠実な家臣とも言べき Samir は、このような事故では誰も生き延びられるはずはないので、彼女は再び安らかに眠っているだろうと述べたが、Ramses は、自分が彼女を脅して、夜の闇の中に追い出したことを悔やんだ¹⁰⁴⁾。

Julie と Alex を帰国の途に着かせる列車に乗せる前に Ramses が Julie に不死の霊薬を飲む意思はないのかと再度尋ねたが、彼女は、彼への愛は変わらないけれども、その申し出は受け入れられないと断わった。Alex は顔形は Alex でも、今や別の人間と化し、彼の恋人は Ramsey が知っていた危険な狂女だったという説明を憤慨しながら聞いていたが、やがて心を閉ざしてしまった¹⁰⁵⁾。

イギリスへ向かう船に乗った Julie と Alex は完全に抜け殻のような状態で悄然としていた。Alex は、Cleopatra と名乗っていた女は全然気が狂っているようには見えず、陰鬱で悲しげではあったが、彼女と自分は愛し合っていたと Julie に語った。「彼女を失うだろうということは最初から分かっていた。彼女はこの世の人ではなかったが... これまでに見たどんなものよりも現世的だった。」¹⁰⁶⁾と Alex が述べると、Ramses に対して全く同じように感じてきた Julie は彼の言葉が真実であると痛感した。Alex は、自分と Julie とは、それぞれ Cleopatra と Ramsey のことを忘れ、自分たちが愛し合ったことなどなかったかのように、生きているふりをし続けるのだと言った。

息子と Julie を駅で見送った後、身も心も疲れ切った Elliott がホテルで眠っている間に、彼が渴望していた霊薬を Samir が届けに来た。「あなたの決断にお任せします。哲学と賢さがあなたを支えてくれますように。あなたが正しい道をお選びになりますように。」¹⁰⁷⁾と記された Ramses からの手紙を長い間見

つめた後、Elliott は薬の瓶をポケットに入れ、痛む足が無感覚になるまで旧市街を歩いていた。内心の苦悩と闘いながら日の出まで一晩中歩き続けて疲労の極に達した彼は、バザールの中で壁に立てかけてあるミイラの列に目を止めた。彼は、Malenka が彼女の愛した美しいイギリス人の遺骸を用いて作られた国王のミイラは観光客に売られるだろうと言っていたのを思い出した。そして彼は自分の前に立っているミイラの巻き布の下から紛れもない Henry Stratford の顔が覗いているのを凝視した¹⁰⁸⁾。汚れた巻き布の中に永遠に閉じ込められた Henry を見たときに Elliott がどのように感じたか Rice は何も述べていないが、彼が死を忌まわしいものとみなして^{しりぞ}斥け、新たな生を受け入れる決断をしたことは明らかである。太陽が空高く昇る頃、Elliott は霊薬を飲み干して生気を取り戻し、視力が驚異的に回復した結果、壮大な砂漠がこれまでに美しく目に映った。健康を完全に取り戻した自分には見るべき記念碑や奇観や街々が存在するのだ¹⁰⁹⁾という歓喜が彼の胸に溢れた、と述べられている。Rice の創造した人物の中で Elliott と最も類似しているのは *The Tale of the Body Thief* (1992 年) に登場する超常現象研究機関 Talamasca の総長 David Talbot であろう。Ramses ほど思慮深くはない Lestat によってヴァンパイアに変身させられて永遠の若さと不滅の生命を与えられた David は、呼吸するたびに、目の前に新しい色や形が見えるたびに、Lestat が自分に与えてくれた新しい視界、新しい人生を自分がどれほど望んでいたかが解ったと述べている¹¹⁰⁾。年老いて死が間近に迫っている学者 David が切望していた永遠の若さと不滅の生命は、いかなる代償を払うにせよ、まさしく Elliott が手に入れたいと願っていたものであった。

一方、船の甲板に立って眼下で逆巻く波を見つめていた Julie は、London に戻っても、今後の人生は、ただ生きているふりをする悪夢に過ぎないだろうと感じた。恐ろしい知識と恐ろしい後悔を一生胸に秘めているよりは暗い海に身を投げの方が良いと彼女が考えたとき、海上で宙吊りになった彼女の体を Rames が捕らえた。「死を生の上に置いてはいけない。」¹¹¹⁾と彼は言って彼女を抱き締めた。永遠の生を呪いと解釈し、自らを「呪われし者」と呼んでいた

Ramses が物語の最後の部分で上の言葉を述べているのは誠に意義深い。彼はかつて墓の中で眠りにつく決心をした時に、実は、いつか再び目覚めて、新しい世界と新しい賢明な人々と会うことを夢見ており、自分がもはや孤独な放浪者ではなくなり、呪われし者 Ramses が不死の Ramses となることを願っていたのだと述べていたが、Julie の命を救い、生きることの尊さを彼女に教えたことによって、真に不滅の存在となったのだと理解することができる。翌日、朝の太陽が射してきたときに、Julie は遂に Ramses が勧めた霊薬を飲み干した¹¹²⁾、と述べられている。彼女がその薬を飲むに至った理由は、いかなる謎や危険があろうとも、愛する Ramses とともに人生を歩みたいと望んだからであろう。

Cleopatra と Alex が乗っていた自動車と衝突した後で南方へ走り去って行った列車の貨車の一番底の木枠の下に、黒焦げになった Cleopatra の体が押し込まれていた。この場面は、Richard Marsh 作 *The Beetle* の中で Isis 神に仕える女司祭が Victoria 女王時代のイギリスに渡り、自分のもとを去ったイギリス人の恋人に復讐するために彼の婚約者を誘拐して逃亡する途中で、列車事故に遭遇し、甲虫に変身した女司祭の体から滲み出たと思われる異様な液体の染みだけがコンパートメントに残されていたという記述を思い起こさせる¹¹³⁾。しかし決定的な相違は、*The Beetle* の邪悪な女司祭の体は消滅したと推測されるのに対して、Cleopatra は霊薬のおかげで見事に復活したという点である。そして大火傷を負って、瀕死の状態で運び出されたと聞かされている女を Sudan のジャングルの中の診察所で診察しようとした若い医師は、彼女が火傷などしておらず、極めて美しいことに感嘆した。患者と関係を持つことは医師として罪深く忌まわしい行為であったが、Cleopatra の磁氣的魅力には抵抗できなかった。自分の無事を知らせるような人はいるかと医師から尋ねられた彼女は「友人たちはいるが...待たせておけば良い。互いに会う時間はある。この世の時間全てがね。」¹¹⁴⁾と囁きながら、医師を抱擁した。

【注】

- 1) Anne Rice, *The Mummy or Ramses the Damned*, p. 4.
- 2) *Ibid.*, p. 4.
- 3) *Ibid.*, p. 14.
- 4) Bram Stoker, *Dracula* (Case Studies in Contemporary Criticism, New York: Palgrave, 2002), pp. 108–109.; Bram Stoker, *The Jewel of Seven Stars* (Middletown: Seven Treasures Publications, 2016), p. 177., p. 180.
- 5) Anne Rice, *The Mummy*, pp. 17–18.
- 6) *Ibid.*, p. 23.
- 7) *Ibid.*, p. 23.
- 8) *Ibid.*, p. 24.
- 9) *Ibid.*, p. 29.
- 10) *Ibid.*, p. 45.
- 11) *Ibid.*, p. 49.
- 12) *Ibid.*, p. 70.
- 13) *Ibid.*, p. 73.; David Huckvale, *op. cit.*, pp. 186–187.
- 14) Anne Rice, *op. cit.*, p. 72.
- 15) Bette B. Roberts, *op. cit.*, p. 95.
- 16) Anne Rice, *op. cit.*, p. 74. Susan D. Cowie と Tom Johnson は蘇った Ramses の容貌が、一般にミイラという言葉から連想されるものとは全く異なり、極めて美しいものであったことに注目している。Susan D. Cowie and Tom Johnson, *op. cit.*, pp. 179–180.
- 17) Anne Rice, *op. cit.*, p. 83.
- 18) *Ibid.*, p. 113. Gary Hoppenstand は、驚異的ではあるが、産業化によって汚染されつつある 20 世紀初頭の London を、Ramses がどのように認識するだろうかと作者 Rice が問いかけている、この引用箇所特に注目している。Gary Hoppenstand, *op. cit.*, p. 298.
- 19) Anne Rice, *op. cit.*, p. 118.
- 20) *Ibid.*, p. 119.
- 21) *Ibid.*, pp. 117–118.
- 22) *Ibid.*, p. 129.
- 23) *Ibid.*, p. 131.
- 24) *Ibid.*, p. 131.
- 25) *Ibid.*, p. 133.
- 26) *Ibid.*, pp. 136–137.
- 27) *Ibid.*, p. 140.
- 28) *Ibid.*, p. 147.
- 29) <http://www.metmuseum.org/press/exhibitions/2000/ancient-faces-mummy-portraits-from-roman-egypt> (November 10, 2016)
- 30) Anne Rice, *op. cit.*, p. 147.

- 31) *Ibid.*, p. 149.
- 32) *Ibid.*, p. 156.
- 33) *Ibid.*, p. 156.
- 34) *Ibid.*, p. 157.
- 35) *Ibid.*, pp. 163-165.
- 36) *Ibid.*, pp. 174-176.
- 37) David Huckvale, *op. cit.*, p. 143.
- 38) Edgar Allan Poe, "Some Words with a Mummy" in David Stuart Davies (ed.), *Return from the Dead: A Collection of Classic Mummy Stories* (Hertfordshire: Wordsworth Editions, 2004), pp. 220-222.
- 39) Anne Rice, *op. cit.*, p. 183.
- 40) *Ibid.*, p. 185.
- 41) *Ibid.*, p. 186.
- 42) フランスの Christian Jacq の歴史小説『太陽の王ラムセス』(*Ramsès*, 1995) の中でも, Ramses は非常に賢明な君主であったとされており, Anne Rice が 1989 年に発表した *The Mummy* の Ramses のファラオとしての人物像とかなり重なっている。
- 43) Anne Rice, *op. cit.*, p. 187.
- 44) *Ibid.*, p. 189.
- 45) *Ibid.*, p. 190.
- 46) Bram Stoker, *The Jewel of Seven Stars*, pp. 163-166.
- 47) Anne Rice, *op. cit.*, p. 190.
- 48) *Ibid.*, p. 193.
- 49) *Ibid.*, p. 196.
- 50) Bette B. Roberts は, *The Mummy* の中で最も興味深い登場人物は Elliott であると指摘している。Bette B. Roberts, *op. cit.*, p. 99.
- 51) Anne Rice., *op. cit.*, p. 213., p. 215.
- 52) *Ibid.*; p. 218.
- 53) David Huckvale, *op. cit.*, p. 187.
- 54) Anne Rice, *op. cit.*, p. 235.
- 55) *Ibid.*, p. 228.
- 56) *Ibid.*, p. 229.
- 57) Bram Stoker, *op. cit.*, p. 120.
- 58) Anne Rice, *op. cit.*, p. 249.
- 59) *Ibid.*, p. 250.
- 60) *Ibid.*, pp. 252-253.
- 61) *Ibid.*, p. 254.
- 62) *Ibid.*, P. 255.
- 63) *Ibid.*, p. 257.
- 64) Arthur Conan Doyle, "Ring of Thoth" in E. F. Bleiler (ed.), *op. cit.*, pp. 208-210.

- 65) Anne Rice, *op. cit.*, p. 295.
- 66) *Ibid.*, p. 258. Susan D. Cowie と Tom Johnson は Ramses の輝かしい復活の場面と対照して、Cleopatra が再生する場面の戦慄すべき描写に注目している。Susan D. Cowie and Tom Johnson, *op. cit.*, p. 180.
- 67) Anne Rice, *op. cit.*, p. 260.
- 68) *Ibid.*, pp. 270-271.
- 69) *Ibid.*, p. 278.
- 70) *Ibid.*, p. 285.
- 71) *Ibid.*, pp. 291-292.
- 72) *Ibid.*, pp. 294-296.
- 73) *Ibid.*, p. 298.
- 74) *Ibid.*, pp. 308-309.
- 75) *Ibid.*, pp. 320-321.
- 76) Whitley Strieber, *Lilith's Dream* (New York: Atria Books, 2002).
- 77) Anne Rice, *op. cit.*, p. 317.
- 78) *Ibid.*, PP. 318-319.
- 79) *Ibid.*, p. 320.
- 80) *Ibid.*, pp. 322-323.
- 81) *Ibid.*, p. 339.
- 82) *Ibid.*, p. 341.
- 83) *Ibid.*, p. 346.
- 84) *Ibid.*, pp. 349-350.
- 85) *Ibid.*, p. 368.
- 86) *Ibid.*, p. 369.
- 87) *Ibid.*, p. 371.
- 88) David Huckvale は、古代エジプトの魅力とは、我々の日常生活の倦怠と絶望から我々を救い出してくれるような神秘を古代エジプトが備えていることであり、エジプトを主題とした幻想小説を書く作家たちは、その神秘から靈感を得て作品を創造するのだと指摘している。David Huckvale, *op. cit.*, p. 187.
- 89) Anne Rice, *op. cit.*, p. 386.
- 90) *Ibid.*, p. 387.
- 91) *Ibid.*, p. 391.
- 92) *Ibid.*, pp. 398-399.
- 93) *Ibid.*, p. 400.
- 94) *Ibid.*, p. 403.
- 95) *Ibid.*, pp. 404-405.
- 96) *Ibid.*, p. 407.
- 97) Brian J. Frost は、ファラオが復活した後の *The Mummy* は安っぽい恋愛小説であると評している (Brian Frost, *op. cit.*, p. 32) が、彼が Ramses と Cleopatra の複雑な心理的葛藤をこの作品から読み取ることができなかったのは遺憾である。

- 98) Anne Rice, *op. cit.*, p. 411.
- 99) *Ibid.*, p. 414.
- 100) *Ibid.*, p. 415.
- 101) *Ibid.*, p. 415.
- 102) H. Rider Haggard, *op. cit.*, p. 202.
- 103) Anne Rice, *op. cit.*, p. 420.
- 104) *Ibid.*, pp. 419-420.
- 105) *Ibid.*, p. 421.
- 106) *Ibid.*, p. 425.
- 107) *Ibid.*, p. 424.
- 108) *Ibid.*, p. 430.
- 109) *Ibid.*, p. 431.
- 110) Anne Rice, *The Tale of the Body Thief*, (New York: Ballantine Books, 1992), p. 433.
- 111) Anne Rice, *The Mummy*, p. 428.
- 112) *Ibid.*, p. 430.
- 113) Richard Marsh, *The Beetle: A Mystery* (Penguin Books), pp. 338-339.
- 114) Anne Rice, *op. cit.*, p. 436.

結　　び

The Mummy or Ramses the Damned は、Anne Rice が Victoria 女王時代に数多く書かれた imperial Gothic の小説や、Universal Pictures, Hammer Film Productions などが製作した恐怖怪奇映画の持つ独特の雰囲気を生かしながらも、20 世紀に蘇生した古代エジプトのミイラが新しい世界でどのように生きていったかに焦点を当てた画期的な大衆文学である。更に Rice は、*The Vampire Chronicles* の中で追究したのと同様、この作品においても、永遠の生命が人間にとっていかなる意義を持つかについても徹底的に論じている。

Arthur Conan Doyle, H. Rider Haggard, Bram Stoker を初めとする Victoria 女王時代の imperial Gothic の作家は、帝国主義者たちの冒険を描きながらも、西欧文明と対立する東洋諸国や古代エジプトの神秘主義思想や超常現象に魅せられていた。しかし、彼らの文学では殆どの場合、古代エジプトの文化・宗教思想は、キリスト教的倫理観とは相容れず、忌まわしく滅ぼされるべ

きものとして描かれており、Riceがこの小説の献辞で敬意を表した Doyle の“Lot No. 249”に登場するミイラは邪悪な黒魔術師に操られる知性のない道具に過ぎず、社会を恐怖に陥れる怪物以上の何物でもなかった。そして 20 世紀最高のミイラ文学作品の一つである Bram Stoker の *The Jewel of Seven Stars* において古代の偉大な魔術師であった女王 Tera は 40000 年の眠りから覚めて現代に復活する計画を成功させられずに消滅してしまう。

Rice は献辞の中で「映画においてミイラに生氣を吹き込んだ全ての人々に」この作品を捧げるとも記しており、彼女が Universal や Hammer の古典的ミイラ映画を念頭に置いていたことは間違いないが、これらの映画に登場するミイラの殆どが、恐怖と嫌悪の対象として社会から排斥され、墓の神聖さを冒涇した人々への復讐を果たした後で、悲劇的な最期を遂げている。

このような大衆芸術における伝統を熟知していた Rice は、彼女以前にミイラを文学や映画に登場させた全ての人々に敬意を表しながらも、自分の作品においては蘇ったミイラを個性的なヒーローとして活躍させた。この発想は、ヴァンパイアを魅力溢れる主人公とした彼女の着想と共通しているが、*The Mummy* の主人公 Ramses は極めて善良で親しみ深く、理知的な人物であり、生存のために殺人の罪を重ねる宿命を負ったヴァンパイアとは本質的に異なっている。一般的には闇の世界でしか生きられないヴァンパイアとは正反対に太陽の光を浴びることでミイラから蘇った Ramses の美しさは、神々しい気品に溢れているが、同時に極めて現世的で人間的なものとして描かれている。古代の帝王であった頃に不老不死の霊薬を飲んだ彼は、死ぬことができずに孤独に耐えながら生き続けることが恐ろしい呪いであると悟って地下の墓地で 1000 年間眠っていたが、美しく聡明な女王 Cleopatra によって目覚めさせられ、良き師、恋人として彼女を導き続けた。しかし彼は、Mark Antony との恋に陥ったために彼女自身も祖国エジプトも破滅したことを嘆き、自らを巻き布で包ませて墓の中で 2000 年近く眠っていた。だが彼は将来の新しい世界に目覚めて新しい賢明な人々に会うことを夢見ており、自分がもはや孤独な放浪者ではなくなり、呪われし者 Ramses が再び不滅の Ramses となることを望んで

いた。

1914年にイギリスの考古学者 Lawrence Stratford は Ramses の墓の発掘に成功するが、金の亡者である甥 Henry に毒殺され、Lawrence の娘 Julie も Henry に毒殺されそうになる。しかし London の Stratford 邸で太陽光線を十分に浴びて生命力を回復した Ramses が彼女の命を救う。ミイラから蘇った Ramses は怪物とは正反対の気高い美しさと王者の風格を備えた極めて魅力的な男性であり、Julie は彼に「考古学者 Reginald Ramsey」という新しいアイデンティティを与え、20世紀の社会を彼に見せるために London の街を案内する。彼は新しい世界の驚嘆すべき事物に魅せられ、この時代を受け入れて、聡明で心優しい Julie とともに生きて行きたいと願うようになるが、過去と完全に訣別するためには、もう一度エジプトへ戻る必要があると感じる。Ramses は現代世界の女王とも言うべき Julie への愛が希望に溢れた将来につながると信じていたが、Cleopatra への激しい情熱的な愛が自分にとって完全に過去のものであると言えるかどうかを確認したかったのであろう。

エジプトへ向かう船の中で Ramses はイギリス上流階級の人々との会話の中で George V 世時代のイギリス社会の問題点、古代エジプトのファラオが神殿や巨大な記念碑を建造した真の理由、古代人と現代人の精神の比較について詳述しており、この部分は *The Mummy* において最も重要な文化史的意義を持っている。ここで思い出されるのは Edgar Allan Poe の “Some Words with a Mummy” に登場する Allamistakeo であり、David Huckvale が指摘しているように、Poe は彼の創造したこのミイラを当時のアメリカの社会と文化を批評する手段として用いた¹⁾ことを忘れてはならない。Ramses は、当時のイギリスの社会では、恐ろしいほどの富と不可解な貧困が奇妙に混合しており、非常に多くの機械がほんの僅かな人々のために実に多くの物を生産するが、大多数の人々のためにはごく少しの物しか生産していないと指摘している。Gary Hoppenstand は、作者 Rice が、Ramses のかつて生きていた古代の時代以来、人類社会を悩ませてきた社会悪は現代においても依然として膿んだ状態であり、近代の科学技術の驚異を創造した経済制度が社会全体の繁栄を達

成することには失敗したことを、古代人である Ramses の口を通じて批判している点に着目している²⁾。更に Ramses は、ファラオは民衆にとっての誇りであり、神のような存在であったので、民衆の望む通りに自己表現する必要上、巨大な建造物を築いたのだと説き、その建築のための労働は Nile 川が氾濫して農作業ができない時期に公共事業として行なわれたのだと述べてファラオとしての自分自身の名誉を守るとともに、古代エジプト史の新しい解釈を示している。自分が国を治めていた時代には支配者と民衆は一体であり、民衆が偉大であるためには統治者が偉大でなければならなかったとする Ramses の説は非常に興味深いものであるが、Rice の *The Mummy* 発表から6年後の1995年に出版されて世界的ベストセラーになったフランスの Christian Jacq の歴史小説『太陽の王ラムセス』(*Ramsès*)を読むと、Ramses II 世が民衆の幸福のために生涯を捧げた名君であったことが明らかにされており、Rice が創造した Ramses との性格の類似がかなり認められる。そして Ramses は、物質文明が繁栄し科学技術が画期的に進歩した現代においても、人類の精神は古代と全く同じであると結論している。Cleopatra を妖婦と蔑む Alex に対して Ramses は、彼女が「輝かしい知性の持ち主で、語学の才能と国を治める天賦の才に恵まれ、あらゆる意味で国王にふさわしい精神の持ち主であり、当時最も偉大な男たちが彼女に求愛した」³⁾と反論する。更に彼は、1914年当時イギリスの保護国という地位にあったエジプトが独立を獲得するためには Cleopatra のような知略に富んだ政治家が必要であろうと主張して、聞き手たちを完全に圧倒している。*The Mummy* が怪奇小説の枠を乗り越えた優れた大衆小説である理由の一つは、Anne Rice がいかなる先入観にも捕らわれず、古代エジプト人の代表として20世紀に蘇った Ramses に目のさめるような自己主張を行なわせていることである。

Cairo 博物館で身元不明のプトレマイオス朝時代の女性のミイラを見た Ramses は、それが彼の生涯の恋人であった Cleopatra だと識別し、不老不死の霊薬をふりかけて蘇らせようとするが、遺体の損傷が甚だしかったため、彼女は肉体も精神も完全に癒えていない状態で復活することとなる。太陽光線を

浴びて巻き布の下から神の像のように美しい体を表わして復活し、聡明な Julie の愛情に包まれて 20 世紀の世界で生きることを学んだ Ramses とは対照的に、錯乱状態の精神と傷だらけの醜い肉体で再生した Cleopatra は、殺人への嗜好と制御しがたい欲望に支配された怪物的存在として描かれている。現代の人々の恐怖と嫌悪と軽蔑の視線を浴びることに耐えられず、激怒に駆られて殺人を繰り返すことになる彼女は、自分に銃弾を浴びせた Henry を直ちに抹殺するが、これは Lawrence を毒殺した Henry に対する一種の天罰と解釈できる。Lawrence の親友で古代エジプトへの造詣の深い Elliott Savarell 伯爵は早すぎる老いに悩まされ、Ramses の霊薬で若さと健康を取り戻したいと切望していたので彼を尾行し、Cleopatra の恐ろしい復活に衝撃を受ける。しかし彼は、心も体も病んで苦しんでいる彼女に同情するとともに、急速に美貌を取り戻した彼女に深く魅了されて、何とか助けようと努力する。

Ramses が不老不死の霊薬に秘められた「世界の終焉をもたらす恐ろしい秘密」について詳述している箇所では SF 的な恐怖が描かれているだけでなく、実は必然的であるために、読者は絶望的な悪夢に陥ることとなる。すなわちこの霊薬を吸収した細胞は、植物であれ、動物であれ、無限に自己再生を繰り返して、もとの姿に戻ろうとすることに加えて、霊薬を飲んだ不死者は絶えず空腹を感じているために一般の人間の食料を消費し尽くす危険性もあった。このように霊薬の管理方法を誤れば、地球上の「生と死のリズム」が危機に晒されることとなり、しかも薬液の完全な廃棄は不可能であることに加えて、その製法を覚えている Ramses は、いつでも作り出すことができるのであった。ヴァンパイア小説においてファウスト的な「永遠の生命の代償」の恐怖について考究し続けている Anne Rice は、*The Mummy* では、死すべき人間にとって至上の幸福であるはずの不老不死の霊薬が我々の思いもつかぬような悲劇を生み出す可能性を持っていると指摘する。霊薬を飲み、その恐ろしい秘密を熟知して、その管理を任された Ramses が自らを永遠に呪われた者とみなした理由が、よく理解できるであろう。

Cleopatra のミイラを霊薬によって蘇生させたものの、それが狂った殺人鬼

であったことを後悔する Ramses であったが、完全な復活にはより多くの薬が必要であると Elliott から聞かされると、彼女を助けて無傷の体にする。だが精神的にはまだ完全さを取り戻していない Cleopatra は、瀕死の Antony を救わなかった Ramses への激しい怒りを胸に秘めたまま Cairo の街へ飛び出して行き、ドレスショップの女主人を殺す。しかし Cleopatra は、Elliott の息子 Alex の純真な優しさにふれて、古代の悲劇的な人生では経験しなかった清新な愛の幸福に心が満たされ、永遠の生命を持つ自分とは異なる死すべき人間のはかなさゆえの美しさに感動する境地に至った。一方初めて恋の歓びを知った Alex は、彼女が本物の Cleopatra とは信じられなかったが「我が女王」と呼んだ。彼女は、自らの破滅を知りながらも暗黒の闇の中に永遠に引きずり込まれるような Antony への情熱的な恋から解き放たれて、若い Alex とともに新しい人生を歩みたいと願うようになった。このような彼女の複雑な心理的葛藤を Anne Rice が巧みに描き出している点は注目に値する。

Ramses から賢者として高く評価されていた Elliott は、ミイラを盗み、連続殺人事件を起こした犯人は Henry であったという仮説を思いつくが、現実には Cleopatra に殺された Henry の亡骸はミイラにされて贗の遺物として売られていることを Elliott は知っていた。The Mummy の中で Ramses は、古代エジプトの墳墓が西洋人たちによって汚され、数えきれないほどの亡骸が辱められたことを糾弾しているが、エジプト人側が、死亡したイギリス人の遺骸をミイラに加工し、“Egyptomania” に浮かされている西洋人観光客たちにファラオのミイラとして売りつけるというストーリーは皮肉極まりないので、自民族中心主義に凝り固まった西洋人たちに対してエジプト人が行なったこの上ない復讐であると言える。Anne Rice が、これまでのどの大衆芸術でも描かれなかった斬新な方法で悪人に正義の裁きを下した点に注目すべきであろう。

Ramses, Julie, Elliott の一行と Alex に伴われた Cleopatra が偶然にもオペラハウスに集結するというストーリーの展開はサスペンスに富んでおり、彼らを結びつけている要素を Verdi の歌劇 *Aida* とする Rice の構成は実に見事である。Ramses と Julie が客席で接吻を交わすのを見た Cleopatra は激しい嫉

妬を覚え、Julie への憎悪で心を焼き尽される思いがすると述べられており、彼女は自覚してはいなかったが、女王としての自分を長年にわたり導いてくれた Ramses を心の底では深く愛し続けていたと推察される。彼女は、かつて Ramses が Antony の命を救おうとしなかったことへの報復として、現在 Ramses が愛している Julie の生命を奪うのだと明言する。しかし彼女は Alex と親しく交わるうちに人間の心の無垢な優しさに触れて、死すべき運命にある人間の生命の尊さを重んじるようになり、怒りに駆られて人を殺すことの虚しさを痛感するようになっていたので、最終的には Julie の殺害を断念する。

歌劇の後の舞踏会で Ramses は Cleopatra と言葉を交わすうちに、彼女の意識はもはや錯乱しておらず、賢く誇り高い策謀家の女王の個性が蘇っていることに気づく。自尊心の強い彼女は、自分が彼を愛していたことを認めるのは誇りが許さなかったので、Julie の命のはかなさを暗示するような言葉を述べて故意に彼を刺激する。Ramses と Cleopatra は、愛し合っていた昔の頃と同じように言い争っていたのだが、彼の怒りを恐れた Cleopatra は車で砂漠へ逃走し、彼女と Alex を乗せた車は列車に激突する。Alex は無事であったが、大火傷を負った Cleopatra の体は貨車の下に詰め込まれたままの状態で、南方へ運び去られた。Cleopatra を事故に追いやった責任を悔いている Ramses には知るよしもなかったが、彼女は不死の霊薬の効果によって Sudan の療養所で健康を取り戻し、若い医師を魅了していた。Rice が、ミイラから蘇り、悲惨な過去の記憶に苦悩しながらも、新しい時代に新しい人生を開始させようとしている Cleopatra を、極めて個性的な人物として描き出している点は特筆に値する。

一方、不老不死の霊薬を飲んで永久に自分とともにいてほしいと Ramses から懇願された Julie は、彼の申し出を受け入れることができぬまま、傷心を抱いて、かつて自分の婚約者であった Alex とともにイギリスへ帰国することとなる。人生で初めての真の恋の喜びと苦しみを経験したことによって、Alex は *Paradise Lost* の Adam と同じように賢くなるが、二度と無垢な自分には戻れなくなっている。Ramses と別れて London へ戻り、無意味な人生を送るこ

とに耐えられなくなった Julie が船から身を投げようとしていたとき、彼女の身を案じて追ってきた Ramses が「死を生より上に置いてはいけない。」⁴⁾と言って、彼女を抱き締める。Ramses と再会した Julie は遂に霊薬を飲む決心を固めるが、それは、霊薬にどのような危険と災厄が秘められているとしても、不滅の愛を信じて彼とともに生きる道を彼女が選んだからであった。不死の代償として永遠の孤独に耐えなければならなかった呪われし者 Ramses は、現代の女王とも言うべき Julie の愛を獲得することで真に不滅の存在となり、*The Mummy* においては古代と現代との幸福な結合が行なわれたと推察できる。Imperial Gothic の作家 Bram Stoker は *The Jewel of Seven Stars* の中で現代世界に復活することを切望していた古代エジプトの霊的洞察力に富んだ女王 Tera の悲願をかなえることを拒んだが、Rice は、Stoker が心の底では期待していたこと、すなわち古代の神秘と現代の理性との融合を、彼女の作品の中で行なったのだと推察できる。

Ramses に常に賢明な忠告を与え、彼の親しい友となっていた Elliott は、物語の終わりに近い部分で、もはや得られないものと諦めていた不老不死の霊薬を Ramses から贈られ、飲むべきか否か内心で葛藤しつつ、夜通し Cairo の旧市街を歩いた末に、バザールの中で壁に立て掛けられて売られている偽りの遺物のミイラが Henry の亡骸であると発見する。余命いくばくもない病身の自分が新たな生命を得ることが適切であるか煩悶していた Elliott は、悪行の報いとは言えミイラにされて闇の中に葬られた Henry の亡骸と遭遇したときに、死に対する激しい忌避感を覚えたに違いない。彼は生への強烈な願望に突き動かされて霊薬を飲み干して瞬時に若さと健康を回復し、若い頃に情熱をこめて愛していたエジプトの記念碑や奇観や街々を見ることができるだけ体力と時間に恵まれた歓喜に胸を踊らせた。Julie と同様 Elliott も、Ramses が秘薬を与えるに相応しい、善良で、思慮深い人間であった。作者 Rice が自分自身の分身としたと推察できる Elliott は、古代エジプトの永遠の魅力とは、古代エジプトの神秘を探求することによって詩的靈感が得られ、虚無と絶望につながる凡庸な日常生活から我々を救済する⁵⁾ 不滅の歓喜を与えてくれることである

と述べている。 *The Mummy* が、エジプトを題材とするこれまでの大衆芸術では決して描かれなかったような視点から「蘇ったミイラ」の主人公を不死の英雄として称揚するとともに、彼と周囲の人々の複雑な心理的葛藤を描いた画期的なファンタジー小説であることを強調したい。

既に指摘したように Anne Rice は、当初、短期連続テレビドラマ（ミニシリーズ）の脚本として *The Mummy* を書いたのだが、プロデューサー側から徹底的な改作を要求されたことに憤慨したために、この作品を小説として発表する目的で書き直したのであった。 *The Mummy* の描写の中で視覚的效果に富んでいる箇所が非常に多いのは、Rice がテレビ映画化を念頭に置いて書いていたためであると推察される。テレビドラマ化の計画は挫折したが、Rice は 1991 年に 20th Century-Fox 社との取引に成功し、James Cameron が監督の候補に挙げられた⁶⁾と伝えられている。ミイラを主題とする小説の中で歴史上最大のヒット作であるとともに Anne Rice の文学に魅了されている読者から深く愛されている *The Mummy* の続編を望む要望が寄せられており、この画期的なファンタジー小説は間違いなくアメリカ大衆文化史に不朽の足跡を残したと言えるであろう。

【注】

- 1) David Huckvale, *op. cit.*, p. 143.
- 2) Gary Hoppenstand, *op. cit.*, p. 298.
- 3) Anne Rice, *The Mummy*, p. 189.
- 4) *Ibid.*, p. 428.
- 5) *Ibid.*, p. 371.
- 6) Susan D. Cowie and Tom Johnson, *op. cit.*, p. 182.

Ancient Egypt in American Popular Culture

—Special Reference to Anne Rice's *The Mummy or Ramses the Damned*—

by

Noriko Onoe

Anne Rice's *The Mummy or Ramses the Damned* is one of the most popular mummy novels in history. She is better known for the Vampire Chronicles, but we must remember that the ancient Egyptian monarchs Enkil and Akasha became the source and origin of vampires and they were finally mythologized in the figures of Egyptian deities Osiris and Isis in her fantastic history.

The Mummy is Rice's most extended treatment of the mummy theme. She wrote her first version of *The Mummy* as the script for a television miniseries, but when the producers wanted to change her intended script drastically, she reworked it into a novel. She tells the readers as follows: "This novel is dedicated with love to... Sir Arthur Conan Doyle for his great mummy stories 'Lot No. 249' and 'The Ring of Thoth' and to H. Rider Haggard who created the immortal *She* and to All who have brought 'the mummy' to life in stories, novels and film."¹⁾

It is widely known that the Victorians were fascinated by the ancient Egyptian culture as a result of Napoleon's Egyptian Campaign (1798-1801) and a string of amazing archaeological discoveries. Upper-class Western Europeans and Americans flooded Egypt in search of treasure, and they brought artifacts including mummies back from their travels. They regarded mummies as the symbol of the mysteries of ancient Egypt. The popularity of Egyptology led to mummy unwrapping events which were held both at large venues and in private homes. "Egyptomania" (craze for Ancient Egypt) gave birth to mummy literature on the reanimation of mummies.

It is true that Rice evoked the atmosphere of the traditional mummy movies and honored the formula of "imperial Gothic," but she has redefined the conventional role of mummy; in this Egyptian fantasy, the resurrected pharaoh who searches for the meaning of immortality, falls in love with the archaeologist's daughter.

Ramses, the protagonist featured in this novel is Ramses II, is one of the most famous pharaohs in ancient Egyptian history. He is immortal because he drank an elixir of life while he was reigning over Egypt. He calls himself Ramses the Damned because his curse is to guard his knowledge of the elixir all his life. After the abdication, he used his long life to serve as a guardian of Egypt's rulers. However, he had himself sealed into a tomb in the year of the death of Cleopatra whom he loved.

An archaeological dig in Egypt in 1914 uncovers Ramses' tomb. The leader of the dig team is Lawrence Stratford, retired head of Stratford Shipping. Lawrence is poisoned by his dissolute nephew Henry in the newly discovered tomb. The crime is witnessed by the mummified Ramses. His sarcophagus is transported to Lawrence's home in London. When Henry tries to murder Lawrence's daughter Julie in the same manner, the mummy of Ramses comes to life and saves her. She is so shocked that she faints. When she regains consciousness, she finds the most beautiful man she has ever seen.

And there was the mummy, standing right there. Nothing about it imagined. Not the dark lock of hair fallen down on his smooth broad forehead. Or his deep shadowy blue eyes. He had torn loose more of the rotted stuff that covered him. He was bare to the waist, a god, it seemed at the moment. Especially with that smile. That warm and embracing smile.²⁾

Julie is enchanted by this handsome and intelligent pharaoh even though she is engaged to marry Alex Savarell, a viscount and son of Elliott, the Earl of Rutherford. Ramses tells her that he needs neither sleep nor sustenance other than the sun nevertheless he craves for eating and drinking. He does not confide his secret that the elixir heightens his libido.

Julie welcomes Ramses into her home and secures the identity of Reginald

Ramsey, an Egyptologist for him. She shows Ramses around modern-day London to span the centuries he has slept. He is fascinated with the technological advancement of this society, but he is aghasted at the cursed immortality of social ills. Ramses and Julie decide to travel to Ramses' homeland Egypt so that he can come to terms with his past before he can continue with his new life. They are accompanied by Elliott, Alex, Henry, and Samir, the faithful assistant to the deceased Lawrence.

In the dining room of the steamer for Alexandria, Ramses talks with the whole group. This conversation will remind us of *Allamistakeo* in Edgar Allan Poe's "Some Words with a Mummy". Just as Poe uses his reanimated mummy as a means of criticizing then-contemporary American society and culture, Ramses the other self of Rice, indicates that the economic system which created the wonders of modern technology also failed to achieve general social welfare. Moreover, Ramses insists that he was a noble pharaoh who dedicated his life to the happiness of his people. It is worthy of remark that he praises Cleopatra as the brilliant queen. We must not forget his words, "... Egypt could use a Cleopatra now to rid it of British domination."³⁾

When he reached Alexandria, Ramses is desperate to find it quite different from what it has been in his memory. Elliott, almost crippled with arthritis, becomes obsessed with obtaining Ramses' elixir. At Abu Simbel, Ramses and Julie become lovers. Upon visiting the Cairo Museum, Ramses recognizes a nameless damaged mummy as being that of Cleopatra. He uses the elixir of life to revive her, as Elliott looks on. His attempt is interrupted by the museum guards, and Cleopatra wakes from death deformed physically and mentally. Her resurrection contrasts strikingly to Ramses' revival. With an unbalanced mind, Cleopatra becomes a homicidal maniac; one of her victims is Henry who tries to shoot her. After his death, Henry's corpse is mummified in a "mummy factory" and sold to the tourists as a pharaoh's mummy. When

Cleopatra pours the remaining drops of the elixir on her wounds, her legendary beauty returns, and Elliott is attracted by her irresistibly. Finally, Ramses heals her wounds completely with more of the elixir. Although Ramses is her lifelong lover, hot-tempered Cleopatra holds a hatred for him because he refused to give her doomed lover Mark Antony the elixir to save his life. We should notice that she bears a blend of love and hatred for Ramses.

Ramses discloses the horrible secret of the elixir to Julie and Samir; if the secret fell into the wrong hands, whole peoples could be rendered immortal, and the very rhythm of life and death would be endangered. He tells them that the cells of plants and animals which are saturated with the elixir renew themselves constantly, and the people died in agony because they could not digest the immortal food. This is why Ramses strictly hides the formula of elixir. It was impossible for him to give the elixir to Antony who planned to create an "immortal army."

Cleopatra unexpectedly falls in love with the naive Alex whose innocence and tenderness strikes a cord with her. She wishes to live her life again with Alex who can comfort her and make her forget her pain. All of the main characters confront at the Cairo Opera House. When Cleopatra watches Ramses and Julie kissing each other, she is so jealous of Julie that a hatred for Julie swells inside her. Even though she declares that she is going to kill Julie seeking revenge on Ramses for his unwillingness to save Antony's life, she loves Ramses dearly whether she realizes it or not. Cleopatra tries to strangle Julie, but her love for Alex enables her to become aware of the fragility and the sanctity of human life. She admits that revenge will not cure her rage and ultimately she desists from killing Julie. She vanishes with Alex and drives a car recklessly across the desert chased by Ramses. Unfortunately, her car is stuck on the railroad tracks. While Alex narrowly escapes death, Cleopatra is apparently killed in a fiery car-and-train crash.

Unknown to Ramses, she has actually survived the accident, and when she recovers her consciousness in an infirmary in Sudan, she seduces the young doctor who takes care of her. Although Ramses pleads Julie to take the elixir again and again, she refuses his offer. Julie and Alex, who are plunged into the depths of despair, leave for London. On the ship going to England, Julie attempts suicide suffering grief over her loss of Ramses, but Ramses reappears to save her life. Julie makes up her mind to take the elixir so that she can join him in everlasting love. Ramses the Damned who must have been a lonely wanderer over the centuries becomes Ramses the Immortal because his love for Julie is proved to be immortal.

Ramses also gives the elixir to Elliott as a token of gratitude. All night long Elliott walks through the alleyways of old Cairo, pondering over the question whether he should drink it or not. At sunrise, he comes across fake mummies standing along the wall in the bazaar. Beneath the wrappings of a mummy Elliott sees the face of Henry. Gazing at "Henry locked in the filthy bandages forever,"⁴⁾ Elliott has a strong desire to live long. After drinking the elixir, he immediately begins to feel euphoric; he is greatly pleased that he is able to visit so many monuments and wonders and cities which he loved with youthful zest. As David Huckvale indicates, Elliott, the former lover of Lawrence Stratford, states that the attraction of ancient Egypt is that it can transport us away from the boredom and hopelessness of everyday life.⁵⁾ Elliott, the other self of Rice, tells us that we can derive poetic inspiration and everlasting happiness through the quest of the mysteries of ancient Egypt.

【注】

1) Anne Rice, *The Mummy*.

2) *Ibid.*, p. 76.

3) *Ibid.*, p. 190.

4) *Ibid.*, p. 430.

5) David Huckvale, *op. cit.*, p. 187.